和字乃ふるれ山ぶみ　新

イ13
1132
4

和歌布留新山不美書之四目録

雑の部

天 一	日	星	雲 二
雷 三	風	颪 四	嵐
雨	火燈 五	煙	塵 六
曉	朝 七	書 八	夕
霄	夜 九	山 十	根 十一
嶺	嵩	巒	杣
谷 十三	岡	関	路 十二
枝折 十四	驛	坂	林
杜 十五	野	原 十六	橋
石 十七	岩	巖	田

畑　海 十八　浦 十九　湖 二十
濱　浮 二一　嶋　湊
津 二二　崎　磯　沖
澗　瀬 二三　迫門　門
灘　洲　渡　泊
瀧 二四　河 二五　淀　岸 二六
江　沼　澤 二七　池
堤　井　水 二八　堰水 二九
浪　淵　温泉 三十　國
都　古都 三一　故宮　禁中
故郷 三二　水銀　郡 三三　里
村 三四　市　山家　山居

山舘　山亭　田家 三六　家
庭　砌　籬 三七　戸
窓　門 三八　隣　菴
閑居　幽居　幽栖　閑中
寺 三九　古寺　蕭寺　木 四十
枝　梢　松 四一　榊 四二
杉　槙　檜 四三　楢
柏　槲　厚朴 四四　長女萩
栢　椿　桂　橿 四五
櫪　鈎樟　樫　楸
栗　桑 四六　櫧　檉
天木香　合歡木　槻　楪 四七

草　苔　蓮 四八　蓬
萍　蘋　蔓　蘿
鞭草 四九　莫鳴草　紫　莇草
三蒦　芦 五十　葦　藻
蕁　沼縄　菅　木綿
蓋　紅 五一　忌草　恐草
思草　篠　竹 五二　鳥
鶴 五三　雞 五四　鳥　雀
鳩　鷺 五五　鵲　山鳥
鶏　百舌鳥　鵙　鷲 五六
容鳥　山雀　馬　牛 五七
犬　猿 五八　狐　猪

熊　虎　猫 五九　鼠
兎　象　鼯　龍
亀　貝 六十　蛭　我柄
繭 六一　蜻蛉　蜘蛛　蟻
蝸 六　蓑虫　魚　鯉
鯽　鮎　鱸 六三　鯛
蟹　日調　御調　薬 六四
酒　宴　盃　文書 六五
書　本　画　硯
筆　墨　紙 六六　琴
和琴　箏　琵琶　管絃
笛 六七　鼓　鐘　蹴鞠 六八

碁　弓　箭 六九　矢
太刀　劔　刀　斧 七十
玉　金　鏡　櫛 七一
櫛笥　髪　鬘 七二　掻頭
笠　簑　杖 七三　沓
裹　荃簀　筵 七四　席
床　簍　樋　火坂
枕 七五　衣　絹　裳 七六
衾 七七　緒　紐　帯 七八
絲　綿　布　錦 七九
綾　車　筏 八十　舟
帆 八一　楫　櫂　櫓

纜　碇　篙　網 八二
綱　縄　魚梁　漁 八三
釣　猟　海士　海人
蜑　泉郎　樵夫 八四　樵路
傀儡　遊女　匠 八五　工
商客　商人　隠士　僧
浄侶　尼　仙人　高貴 八六
行客　親　父母　子
夫妻　幼 八七　老人　老翁
遊士　遠情　眺望 八八　旅 八九
旅宿　旅行　羇中　旅泊 九十
餞別 九一　送別　留別　形見

幽思　九二　感恩　述懐　懐旧　九三
徃事　夢　九四　無常　九五　哀傷　九六
墓　葬　釋教　九七　社　九八
社頭　伊勢　齋宮　岩清水
賀茂　九九　松尾　平野　稲荷
春日　大原野　布留　住吉
日吉　百　梅宮　吉田　祇園
貴布祢　北野　三輪　出雲
玉出島　熊野　祈雨　祈晴　百一
注連　木綿　祓麻　神祇
祝　百二　慶賀　産屋　百三　七夜
裳著　元服　年賀

和歌常盤種山不盡集巻之四

雑の部

○天

あめん　なに　ひさかたのそら
天はそら　一天の空　天つそら　そのうみ
なかれゆく　すめるそら　むれきそら　るのそ
そらの川　そらはまち橋　そのいそく　そのやちまた
まそみそら　かきくもる　なかれゆく　みそらゆく
そらへめぐる　そる　大空

百二　そらの原ふりさけ見れば大空のみよりもあらたにめぐりぬる　大伴家持
ゞ七　あめのなかそらの原そらの月かげのふりそでたつらゆ　読人しらず
古　久方のそらつくれにもすむ人はよものそらにへつるる　元方
六　大空は我より人も皆えぬほどにおもしろくてちるそくれる　よみ人しらず

○日

てる日　はるさし日

日のかげ　日さかり　あさ日さし日　あさひさすかけ

天つたふ日　てる日　あかる日かけ　影日さす

夕日かけ　日なかく　おしてる日影　朝つく日

ゆふつく日　日の光　影日子　入日影

かゝよふ日　日影さす　夕日さす　日影さし

万一　東の野にかきろひのたつ見えてかへり見すれは月かたふきぬ　人丸

〃　わたつみのとよはた雲に入日さしこよひの月夜あきらけくこそ　中大兄

古　[illegible]　よるか

拾　[illegible]　[illegible]

六　[illegible]　[illegible]

○星　ほし

あかほし　星月夜　星のやとり　七夕ひこ星　小牛之

星の林　夕つゝ　よはひ星　ほしの光

南の星　西にめくる　南極の星　天の河原の星

星をつらぬく　星をつらぬ　きらめく星　ちは星

かくせるあき星　たなはた星　星のくらゐ　なかるゝ星

六　[illegible]　[illegible]

〃　[illegible]

〃　[illegible]

[illegible]　[illegible]

〃　[illegible]

○雲　くも

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

雲の波　雲のはたて　行まくも　まき雲
雲はやき　雲ゐなる　雲のやへ立　うき雲
雲のをき　むら雲　うき雲　夕ゐる雲
峯立の雲　横ぎる雲　雲のゆきゝ　おりゐる雲
はなれぬる雲　雲ゐる谷　雲ゆく空　雲の衣
雲の上　あられ雲　風にしたがふ　雲かゝる
風ふきとよ　出入雲　むらさきの雲　八重なり
うかべる雲　雲の上し　雲踊る　たなびく雲
たてる白雲　雲さえ流る　雲のぞよふ　雲みだる

万三 瀧の上の三船の山にゐる雲の常にあらんと我おもはなくに　弓削皇子
〃七 大海に嶋もあらなくに海原のたゆたふ浪にたてる白雲　よみ人しらず
〃 あなし川河浪たちぬまきもくのゆつきかたけに雲たてるらし　〃

〃十五 まれにすくなの神よたれはせるてふ白雲のみねにあらぬかも　〃
古 何代の時世よりかくてわけ白雲のはるかにかゝると絶えせぬ　躬恒
後 よそにのみ峰へにかゝる白雲のゆくへもしらぬ我身なるらん　伊勢
玉 時雨るゝ人わけて雨やとぶ嶺の白雲かゝるやみるらん　つらゆき

○雷　なる神
うちなき　とゞろく　おそろし
いかつち　やけいかづち　光く

万十一 天雲の八重雲かくれ鳴神の音のみにやも聞わたりなん　読人しらず
〃 鳴神の光とよみてさしくもり雨もふらぬか君をとゞめん　〃
〃十九 天雲をほろにふみあだし鳴神も今日にまさりてかしこけめやも　〃
古 あまのはらふみとゞろかし鳴神もおもふ中をばさくるものかは　〃
〃 てる神もおとにのみきく鳴神も行の中をさくるものかは　よみ人しらず

○風　かぜの名

天はやせ　しなとの風　こち風　時は風

おひ風　ねこ山ノ吹　野分風　夕風

風はやし　風さゆる　吹おろし　あゆの風（字解之）

何となく（人を悲しむ）ひくらく　あらく風　山下風

木の下風　吹のぼる谷風　きそくさち　まころち

家の風　かきの音　風おちかく　久しの風

東の風　風のまもり　光はさぬ風　つむじ風

雲くもせ　高嶋風　あまり風　佐保風

初せ風　難波風　八ヶ浜風　うらうせ

これとの風　風の行く　あらしの風　伊吹風

沖のまちち　立田姫　風まつり　晴風

万一　うねめの袖吹かへす明日香風都を遠みいたつらに吹く　志貴皇子

〃六　時は風ふくへくなりぬ香椎かた汐干の浦に玉も刈てな　小野老

〃十七　あゆの風いたく吹らしなこの海士の釣する小舟こき隠る見ゆ　家持

〃九　さゝなみの比良山風の海吹は釣する海士の袖かへる見ゆ　槐本

拾　大空をちるあそく吹風のわくれもめくしこえねハ　躬恒

六　よし風のよめる時ハこく舟のほかにはなきにあたらかせかれ　覚之

○嵐　やまおろし　山おろしの風

山より吹おろす風をあらしともいふ又山おろし

又あらしとはつよく吹れハいつもあらしといふ

嶺山おろし　谷おろし　高ね颪　夕山おろし

万十三　夜をさむみ山おろし吹て寒き夜を八雲かたきね　読人しらす

古　吹くからにみても志のそんかなしき山おろしの風　〃

○嵐　あらし　何かしの風
あらしふく　山あらし　只はらし　松のあらし
杉のあらし　よものあらし　吹おろし
古 逢坂の山の風ハさそ人ゆく[illegible]声ハ[illegible]
後 けさの嵐[illegible]かすみあらしの[illegible]
六 我をまたとふやとまつ風のいまさら何ならしなるそ[illegible]き

○雨　あめ
てさめ　きり雨　むらさめ　雨のいと
雨のあし　なか雨　雨そゝく　雨衣
雨る　何事も雨　雨そゝき　雨夜　あまつゝみ
ふりくる雨　水まさる雨　[illegible]　あしき雨　声てる雨
あまやどり　笠やどり　久かたの雨　[illegible]

あまくもり　雨のあくる　新枕の雨　うちしめる
あれひく　雨のうち　さしひき　[illegible]
万三 くもりくるかなしき雨[illegible]
〃四 久方の雨の[illegible]
〃六 久かたの[illegible]
〃四 [illegible]
六 [illegible]

○火燈
あかし火　ともし火　ともし火の[illegible]　いさり火
松の火　何く火　あし火　[illegible]の火
とほし火　もしほの火　さく火　おき火
[illegible]の火　[illegible]火　[illegible]火　[illegible]

後　きかぬにおもてく火のけぶりあはれなき後の世の人とぞ思ふ　西之
六　人を思ふ心のおき火身をそやけぶりとなみよねぬおから　よみ人しらず
〃　あしやとの雲枝の風をさまよひて海人のともしびそれまちぬれ　〃

○煙　けぶり

飯けぶり　夕けぶり　しほけぶり　白けぶり
香のけぶり　野のけぶり　かまどのけぶり　けぶりきえゆく
くものけぶり　けぬけぶり　蝉やくけぶり　けぶりまくゆる
けぶりのやま　けぶりそ細き　飯け夕けのけぶり　一むらけぶる
立つるけぶり　けぶりよもぎふ　けぶりたな引　けぶり来あふ
もしほのけぶり　松のけぶり　若葉のけぶり　芦火のけぶり
尾やのけぶり　わらやのけぶり　思ひのけぶり　むろのけぶり
塩けぶり　けぶる汐照　あのけぶり　香けのけぶり

かけぶりそふ　恋のけぶり　けぶりくらべ　炭竈のけぶり
浅ひのけぶり　富士をわかのけぶり　藻塩のけぶり　室の八嶋の烟
ほさるけぶり　ふしのけぶり　あさくけぶり　立のぼる
さえかつく　けぶりさわぐ　塩竈のけぶり　塩やのけぶり

○煙をきゆる　煙をなびく

万七　志かの浦の波やけぶり風をいとひて立八のかけてしほたれそよ　読人不知
拾　いつとても我恋やまん人恋しき身を浅ひけのけぶりとゆくとも　西之
六　そらに六みの志らみも末ぬるかゆゑれなきのけぶりとえねん　伊勢
〃　おすくけぶりそらく大井の空をさかくれむかなるある　よしひと
〃　須のうの松のけぶりよもしも浪の舟くしそ加すむるてぬる　つらゆき

○塵　ちり

みるちり　ちりのちり　飯くちけぶり　光をぢゆる

ちりの身　ちりぬる世　はらふちり　枕のちり
床のちり　ちりの山　ちりひち 泥　いくよのちり
ちり結へそ　名のちり　法のちり　ちりをまもる
古 風のうへにありかさためぬちりの身ハ行衛もしらすなりぬへらなり　読人しらず
六 ちりつもるちりの数にも思はぬを埋もれてこのあはれとそみる　〃
〃 つれ〳〵と山に来てふ鶯も花ちれとうくもあるかひちりすハ　〃
〃 ちりをたに床のちりはらますらんともちりはらはさらん　〃

○暁　あかつき　あけぬくき
いなおほせ　鳥のそらね　あけはなれ　山かつら
明ぬれは　あかつき　わかるる　暁や
あけはなて　鳴きる月　あかつき霧　そらの声
鳥の音　ねさめ　鳥も八声　夜ふかき声

ゆふつけ鳥　鳴くしき　しめし鳴る　あけからし
相さ結て　暁かけて　暁かけ　けしきの鐘
玉くしけ　まつよの山　ぬえ玉の暁
拾 暁の目つくる瀬を花のあさちかひけの音をきて　公実
〃 さしつの暁て花来ぬや八声の鳥の声おとろかさらん　兼良
〃 忍ぶ事月の暁ハ心まもみまれおなをはかなる　治円
え 暁とつけの枕をそけして暁ともわかぬまかるの露の　俊成
新秋 まつ鳥方て抽忍やとのなか紀よハ鳥の鳴くはかなは　定家
〃 身のうちにか露の加はのまるを暁おもろぬあかつきそれよ　雅経
〃 暁のねそ信を来きさう浮世の夢のさめ果まくりし　家隆
玉 月の入枕の山あかつきあかく新鶯を聞くるかつきのそら　信

○朝　あさ　はつあさ

朝づく日　朝ぼらけ　朝まだき
朝なゝの　朝しめり　朝戸出
あさかげ　明くる　明てさ
朝なけ　はさい　朝風　朝なく
朝川　朝市　朝寝髪　あさ茶
朝びらき　朝ころ潮　あさぎぬ
朝くもり　朝まつ川　朝すゞみ　朝ゆふけ
朝雲　ねての朝け　あさみ袖　朝露
あさ霜　いねぬる朝　朔り朝　朝まつりごと
あさ寺　朝鶏　けさ
万千 秋萩における白露朝な／＼玉としそ見ゆる　よみ人
玉 起きてけさ又河るをいとれ氏ぬのなきかれなくし
〃 とふ浦る一枝の露ちて秋されやのまさやいつる舟人
新古 あさ風とはの朝ぼらけなひの水まにわかけ　貞良
〃 明やらぬねやのひまのくまもれつゝあぬまみれハ朝ほどれ　家隆
○晝　ひる
ひるま　ひるけ　かゝやく日　ひる中
午の貝　ひるゝ　まひるの日
新古 芝垣のみけれみ（え）る来ゆくハ雲もひる木の色の枝くき　家長
〃 人も見ハあれ志くしむきうみいくもひるのまらひるせ　信実
〃 みさかさへかあまおきのなのやそても志ほむはハ（来）はなり　光俊
○夕　ゆふへ
ゆふづく日　ゆふ月夜　夕やみ
夕陰　夕つゝ　夕暮　ゆふ鶏　ゆふけ
ゆふころ　ゆふされ　夕川　ゆふさゝき

ねぐらとふ鳥　ゆふ霧　たそかれ時　夕ぐれ

夕まとひ　夕まくれ　夕けふ辻占　これやこの宿

ゆふ月　ゆふやみ　墨ぞめの夕へ　夕されハ

入日のかげ　夕ぐれ　撞る鐘

玉ゆけど松たちかれぬ松とられ松くれゆく入相の鐘　家隆

風とはぬうき世をよそにすむ庵のゆふへの色のなつかしまれ　慈鎮

〃夕つくひさしやみゆる松がえのはまやはなくかへる山人　凡雲

新古にほふよけしそらぬとけひくしなと見し我世もねてぞあへし　為家

〃霜こえてけふくれぬと大ほらる松の二階毛衣にさ　知家

〃ゆふけの高浪まかぬくあに出くゆすとろきの民のあさぶ　信実

○宵　よひ

よひよひやよそとがめやもやさしくひとつまてで夜の手枕をきぬ

よひハ初更の比まくをいひよくく夜半をいつかとあるのかるなど

古しへハまつひてあまりき事なれど新撰六帖なとにもよひ

よれとつくよあれハ古くまつなうひてつかいそのおはる

よひの間　よひ過る　ふけぬ夜　ゆふやみ

よひのゆめ　よひまとひ　ささね

新古いつかまんへてもうけもよひのまにかふくいつるふのそ月　家隆

〃はるかやなでやどるも宵からやちちを起ぬひまに越ん　為家

〃照夜のまちしや文われてのすはかりほかりの夜の比　信実

○夜　よ　よひ　よは　よるふ

ぬえ玉の夜　夜すがら　夜ころ　夜く

よ半　中夜　夜床　夜くらへ山姥

夜ふかく　よる　ねぬる夜　夜なかき

衣うち　衣庭　よひのま　衣くばり　定家之
ほし月衣　さ衣ぞ　衣手入　うしろ河
うし綿　はぬる衣　ぬる衣おちる袂　衣乃出
月衣　赤ぎし　あさる衣　面も衣
衣子　ころも衣　衣うせ　衣あらし
衣の錦　衣まぜ　雲衣　よるの衣
よはむ　衣妻　よる後　よもし火
衣のすき手　張る衣

歌　夢の中に咲ちらす衣をはらぬて衣へ　家隆
〃　宮あはれまでのぬれとぬとぞ打ころも　知家
〃　暁はやら露かの音にて打きをきさぬ衣まで　為家
玉え　文ぬかりいはつらぬはれこそ人ちかし　隠

○山　あしびのやま　みやま
すべて山をいふ詞に此題を名所に於いては此字を用て山をよみ入たるをば山と云へる　此字

新高の山　まくろの山　高る山　みかさ山
冬のなる山　外の峰山　和田の山　とやま
うき山　ふるさ山　山のさけ　桂らぎ山
み山のおく　山のけぢ　幸山　東みよの山
山のむしけ　空え山　はつ山　葉ひろの山
幸さなみ山　はつし木山　山下陰　山しの山
祢山　そのへ山　山の上ひ　高松
雁さし　末の山　山うき　ひと山
八まえ山　まへ山　むへ山　山ひて

山中　山もと　ねやま　山きは
ひら山　よもの山　山のこえ　山のあなた
しげ山　山ぶみ　山のそがひ　と山
み山ぎし　山のこなた　ふかき山　山路
山おろし　山のかけ橋　橋本の山　そま山

万一 よき人のよしとよくみてよしといひし吉野よくみよよき人よくみつ　天武天皇
〃三 ふじのねをたかみかしこみあまくもゝいゆきはゞかりたなびくものを　よみ人しらず
〃七 古へのことハ志らぬを我みてもひさしくなりぬあまのかく山
〃 みわ山のその山のまへ子らか手をまき向山ハつねにあれど
〃 大汝すくなみ神のつくらしゝいもせの山をみらくしよしも
古 消えはつる時しなければこし路なる白山の名ハ雪にぞありける　躬恒
拾 見てまたなるといへはすかにこえて峯にきえゆくひとこゑ　忠見

○根 ○嶺 ○嵩　ね　たけ　たかね
たかし　みねつゞき　みねの松　雲のかゝる
外山のみね　峯のかけはし　枕のみね　岩のかよひ路
かさなるみね　いくへのみね　峯のまさご　つくばね
高山のみね　みねうつり　峯の庵

万七 みよしのゝみたけの岩のうへむしろ岩のうへにそてぬきれ子　読人しらず
〃三 つくはねをよそにみんつゝありかねてゆきけの道をなつみくるかも　丹比国人
古 白雲のたえずたなびく峯にだにすめばすみぬる世にこそありけれ　惟喬のみこ
後 高砂のをのへの桜さきにけりとやまのかすみたゝずもあらなむ　大江匡房

○山窟　いはや
万三 大なむち少彦名のいましけん志はの岩屋ハいく世へぬらん　生石
〃 はたすゝき久米のわくごかいましける三ほの岩やハ荒にけるかも　博通

生　芽生花を雨落々と枯る生けんわらぬ岩やをそてハ如生床　ゆる

○松　そ枝

そなれまつ　松のみや　松ふく　千方山

松本とる　松本さち　松くらし　松くされ

神の松本　宮本引　宮本宮　松くらを

山の下松　浦の松山　枯木の松　松はら氏

松のふれ木　本まつり　斧のみち　ふつ墨縄

ひくて待木　若まつ松　斧のひゞき　松川のふくし

名所　泉の松　森　丹生の松　末之端の松山　尾の松　岩

万七　古本植つる松人いさむかなほのかに流るゝけんやも　古人

六　うき世をあつき松よろ氏のやむ跡もれくるひやくるかな

〃松おろし松山川の岩ね床をはらふかな　ち　ぬ夫　亀

〃枯山のしらぬ枯られのおもむく人はひゞきて更ぬらむ〃

○谷　多に

さしくだ　谷の戸　谷ふところ　杉山の谷

ふかとの谷　埋木の谷　ゆあ生の谷　谷かくれ

谷てき　谷る　谷ふけめる　すゞみる谷

谷のかそハ　苔むし谷　谷のわそ床　谷の下風

谷の埋木　谷の枯木　谷の木のま　谷底の庵

ひくわ枯き谷　谷の陰字　谷の板をし　細き川

古　岸むしよ谷ハ生えしよ流るれハ岸てゝよそる翁も生ひまつ　修史

後　世中にしられぬ山の身なりせば谷のうもれ木やはてなく思へん　よまれ

○　六　深き山家の谷しふかくれ住るかなみもなひハはなそよまち〃

○囲　をこつ

水茎のあとハ筆跡をいひかへてよめる又茎ハ岡の名なりといへり
許多歌の説まて勝間田にくりくりとそへてあるへし

まさく　なかれ岡　むらさきの岡　ちかへの岡
そとも岡　嵯中の岡　岡こえの岡　足かもしの岡
新嫁の岡　岡のへや　岡の松子　岡の家

名所　綴喜ノ岡 山城　双ノ岡　舟岡　山科ノ岡　片岡 大和
今来岡　なかとの岡　ゆきくの岡　鶉ヶ岡 未詳

万一 これやこの千代もかハらぬ岡の松やまきをいさむかしをひてれ　中臣女
〃三 秋風のさそふ岡のまのをちこちにかきしるしを　赤人
〃六 岡のへにさきにけるをちよ松のみどりのたえぬ　家持

○関　せき
関の奥　せきもり　関の戸　関山

関路　関守　関の清水　関のあらし
関所あら垣　こゆる戸をさす　はや木　てゆる
行く手　へたゆる　ふる道の奥　関戸の路
ゆきかね　とゝる　板びさし

名所　逢坂 近江　鈴鹿 伊勢　龍田 大和　須戸 摂津　不破の関 美濃　清見か関 駿河　勿来 ならの関 奥州　白河の関 奥州

後　夏はつる月のしらぬとわかれし関の奥をいくたひかけん　八条院
六　逢坂の関のあらしをゆきかへりかねしよはのおもひしりけん　信明
〃　八雲たつ出雲やえの関のてらの戸もさらに人はかよはん
夫木　やへにすかて見ひろし関守の山かけのたかいなかよせ

○路　ち　みち
手向坂の宿に八人まかりけるに末の松のゆるさのまてあはせて　兼仲

都路　春の古路　中みち　幸つ路
舟路　山路　野路　路かゝ
雲路　京の路　関こえの路　川そひ路
出路　路の長手　月の路　下路
路のくまり　長路　路しり人　路もせ
通ひ路　路ゆかり　岩のかけち　ちまた
つま木の路　杉ふるの路　路の片笛　うまやち
橋のうけふむ路　旅の末に路　路のわかれて　里の中路
みちのべ　人すみの路　かくれ路　杣の中路
あせ路　千代のふる路　小車の路　玉ぼこの路
世をさる路　路まよひけ　七の路 五畿七道之　世を納る路
家路　車をくる路　世をすつる路

名所　古の中路　本宮路 信濃　徽田の中路 吉　小野の細道 山城
万　あさ物のあら駒をとゝめて安井に来てきみがゆきゝをそこで来まける　今日
三　天の原ふりさけみれば白雲の八重たつ山の路もはるか　大酒
後　はるかなる山みちゆき路すがら世を川の千代のふる路あはれ八重のまゆり　紀女
六　八十への中井すみあらしみ八千とせよ野中の路みち　堀河院
ゞ　くるしからぬ名をば八百とゞめてけふもとゝろきゆくなり　読人しらず
○枝折　しをり
六　まよふらんゆく中路を山にさまよふ人とまよひきは　読人しらず
新古　吉野山去年のしをりの路かへてまだ見ぬ方の花をたづねん　西行
○驛　うまや
うまや路　うまやつゝひ　うまやの鈴　うまやのをさ
うまやぢ　うまやつき　うまやおちつま　大津のうまやぐ

はるちのうまや　手やくと結　今はや

六　東路のうまやとかへても行やらぬちかくなるなつかしさ　よみ人しらず

〃　東路の里の末ぞはしめて　ちくはなやくと結みそ結ぶ　〃

○坂　はしの

こむけ　みさか　はしゆく　坂のさか

てはら　のぼれハくだる　つく杖　こゆく

後拾　白雲のよそに見えつる行べき山のさかねやみさかれぬらん　能因

続後撰　篠代のさ坂を越てみれなせハかさみしせうね雲さ上の峰　信生

○林　しやし

こもり林　山の林　里の林　里の林

松の林　竹の林　木葉の林　桃の林

こその林めぐる　やえぬ林　やまとの林　路の林　佛入滅の所

後拾　木のかくれぬ路のつかれならハやみはやしのおもかげならん　よみ人しらず

○杜　かみ

みつしハ林にかよへしこよみしまことに入里

みかみ下風　もりの下草　もりの下道　みつのしみ水

山かげの杜　袁の一むら　そともの杜　杜の木陰

杜のしめ縄　みかみ杉　杜の下露　杜の木の間

名所　柞ノ杜　山城　もつしの杜　はるの杜　紀ノ杜　衣田杜

生田杜　摂津　うきの杜　大和　信太ノ杜　和泉　木枯ノ杜　駿河　月読ノ杜　ハ世

古　大荒木の杜の下草おいぬれば駒もすさめず刈る人もなし　小町

六　人しれぬ思ひするがの国にこそ身をうき島の杜ハありけれ　よみ人しらず

〃　ハつせおるこの杜のこのはの木のこ枝にかゝれにほひを杜と上へ　〃

○野

野かせ　野つゝは　小野　野中
のなか　うけ野　ま野　野ゝ山
野ゝら　野路　野田　かれ野
すそ野　しの野　やけ野　園生のへ
きゞす野へ　垣ねのへ　花野　河ゝ野
むさしのへ　野路の末ら　野への庵　野守のかゞみ
まくずの野へ　ふるの野へ　野わけ草木　枯野のへ
大野　春野　春野　夜の野
秋の野　冬の野
名所　宮城野　嵯峨　紫野ゞ　春日野　大和　交野　生野　丹波
春日小野　摂津　須戸の上野ゞ　武蔵野　いなみ野　播磨
万一　あかねさす紫野ゆきしめ野ゆき野守は見すや君か袖ふる　額田王

ゞ　まくはふ芝野にハあはれとおもふのすまはし哀かなみなそこし　人丸
ゞ三　いさゝまつ家ゝ津ゝ国葉の野の路さらはらみ枝て此薄　笠人
六　すゝ虫の音ゆへそ野かゝよ枯れ野へよもむすひ花れ　よみ人

○原　もゝら

野をかよふとよむ又ハ枝原松原木のはらなと原ハよむへからくらくれはちさよむへしとそ

ふし原　紫し　笹原　浅茅原　萱原
笹原　萩原　萩原　すそ野の原
蓬原　草の原　志のゝら　芝原
うらゝの原　よもきか原　外山の原　小松か原
名所　みか原　山城　あしか原　大和　あれのゝ原　摂津　その原　信濃
摂　陸奥の外ゝらか原の草のつゆかきてかれにしとはれハ十かはなゝら　よみ人

六　名にしおへといつきも新し飯をとなへて出ぬるてる奈　慈円

〃　上はなやかにちる紅葉のいちしるく散ともをしく人は見るらん　よしたゞ

振る　岩橋の夜もやよねハ絶てかくほす奥はまことのさしに川　歌仙

○橋　もし

川もし　板もし　名は橋　長はし

うき橋さしく　業橋　丸木橋　岩橋

つきもし　舟もし　岸の浮もし　ひくもし

桃橋　かさゝぎの橋　まゝの継橋ゞ　橋もとら

もし告　橋つくり　高もし　作橋

網もし　かけ橋　朽木の橋　つくる

くかく　わたる　かくる　にくる

こえる　あやうき　わたせる　こゆる

名所　宇治橋　山城　瀬田の長橋　近江　久米岩橋　大和　天の浮橋　丹後

本名のみ橋　信濃　なかしのもし　摂津　佐野のつぎ橋ゞ

指　絶みてるほとまれる旅人や浜名のもしとる名付てあるらん　兼盛

〃　芦かよふそゆるなかる朽橋からむかしの絵のしらなかけよ　清正

拾え　かつきや渡しもハてぬおもかけよくめお岩橋荒れ出かけ多か　師兼

振る　うちわたれ朽のいた橋朽はけり手おもる人のこハゆくせ森　忠信

後拾　橋もしられてすしかハなかれての名をも詠きるあ絵をみれや　公任

○石　○岩　○巌　いし　いそ　以そほ

むかしハ石の上ふる岩とうハゞ　千引の石　さされいし

きれ石　沖の石　石くみ　石の火

いしの床　岩枕　岩ね　岩間

岩ね　岩戸　石橋　岩垣

志つく石　石井　岩井　岩かく

岩のかけち　あらせく岩　岩のかほ　岩の枕石

いはほの中　鷲のすむ岩　あら磯岩　岩屋

岩こけむす　岩の細道　あれたるはし　岩かとつく

名所　土佐ノ石碑 陸奥　笠ノ岩屋 大和

古 いかならん岩ほの中にすまハかハ世のうききこときこえこさらん　読人不知

台 ひと年久しくも河原天衣をとめられつる岩もすりなむ 〃

〃 岩の上をすみかとする河ハ世をも果てもなし　伊勢

撰 波うちてかくと斗八潮ゆきと鳴くもみえし沖のたてる石　雅仲

〃 をりかけてちるけふも中秋ぬる衣のそてにうつの岩のさくらかな　忠岑

○田　○畑

小山田　門田　越田　浜田

あれた田　深田　そともの田　あら田

ぬなは　葦田　稲田　わさ田

くぬ田　古田　ひつち田　むしろ田

廉田　うゑ田　うき田　坂田

すそ田　きし田　ほそひ小田　堤の小田

しろ田　山のすそ田　そしろ田　五る代田

山田のくろ　春の稲田　畔田　みしろ小田

春の山田　ふる田　くほ田　秋田

田つら　田面　そほつ　ふりし田

田井の水　流田なる　あせた　新あらきあらたに

古そく　そほやく　浮山　山畑そへ

宇治山そく　男女のいそく　田井の井戸　かりくの庵

名所 竹田ノ崖 鳥羽田ゞ 伏見ノ田ゞ 井出ノ山田ゞ

伊呂ノ岩田 摂津 安芸ノ早田 紀

万十 足引の山田つくる子ひてすとも縄たにはへよもるとしるかに 読人不知

六 行引の苗まてすてる手つくる杉のまさきの人かくるれゞ

○海 うみ

海よりも深き浦路ちかくよはしてよそ見んハ子細あり浦名出

なまさ物ハしほと言ふまんハ百しゝほそそ

海そら わたつ海 海つら

大海 入海 行く海 あをうなはら

世をうみ 半の海 わたつみ 和布のそこ

海の杉まく 海の中路 渚の海 綾の海

ちひろの海 海へた そはの海 松の下ゆ海

名所 ちゝき ゆふれよ 手ひろの底 あしの海

みつの海 海よせる 南の海 海つら

ますら海 よもの海 やへの汐路 汐の八百会

汐のまちひ 汐けのまち 沖津浪 汐路

うらの入海 うみやまの舟 みるめ

名所 伊勢ノ海 難波ノ海 摂津 那古ノ海ゞ 須磨ノ海ゞ

下総ノ海 与謝の海 丹後 松浦海 肥前 香取ノ海 下総

万三 けふの海よりよくかはからをものこされてまゆ行まのつとみ 今奉

ゞ いせの海おきつしら浪花にもかつゝみて妹か家つとにせん 安貴王

六 ちゝ住川ありしほ浪とよやまつるや底ふかく杉か枝 読人

ゞ やさつしほの沖の汐せまなかれてよ人のよる底ハまてよわの字ゞ

○浦 うら

しほあひの海いづれもかよはしてよむべし

潮路　ことゝふ　うらわ　浦のとほし

うらのなごや　潮さゐて　うら君　うら君

うら松　浦つたひ　うら千鳥　潮まつかぜ

うらうら　うら舟　うらわかれ　うら辰

浦人　潮こぐ舟　うらわき　浦のまさご山

うらの入海　浦山　うらはつゆ　潮よりきち

浦風　うらづたふ　浦鶴　浦のみるめ

潮のりはやし　浦の玉藻

名所　このゑの浦 摂津　住吉浦　須磨浦　和歌の浦 紀伊

塩竈浦 陸奥　二見浦 伊勢　松帆浦 淡路　田子ノ浦 駿河

万二　ひろみせと二河の田子の浦大君の命かしこみわたるはるかも　登人

〃　唐衣の浦見る浜の二種のうらみはゆくまつる床に拍む也

〃　河小の世坂のうらゆ舟出してよるべいへど浦の月を見ん　長田王

古　陸奥ハいづくハあれど塩竈の浦こぐ舟のつなでかなしも　よみ人しらず

○湖　みづうみ

塩やくあま　みやこのあま　塩やき

名所　近江の海　にほてる　さゞなみ

志ハつの浦　ひらの山を　すきあまり　志賀のからさき

おもの海　うら浜　志賀の浦

七　石花海 駿河　多枯浦 越中　吾枝の海 紀伊　安積の海

たる姫の浦〃　麻波のいける海　おほつの浦

万三　あふみのうみは千江の海白ゆふはなとよむ

〃　にほの海やきの月の光りのうつろへば浪の花にも秋は見えけり　家隆

〃　あふせのうみの夕なぎ白雲のありかもひいやしのそてらて恋せん　家持

ゞ三　わか命しまさきくあらは又もみむ志賀の大津によする白浪　穂積老

ゞ十九　藤なみのかけなる海の底清み志つく石をも玉とそ我みる　家持

千　ふる袖の浦やまほの海らんかゝる人をみるめなかれと　上西門院兵衛

○濱　はま

やほかゆく濱　濱路　濱田　濱のまさこ

濱つゆ　濱つら　濱菜　濱松かえ

濱ゆふ　濱ひさき　貝ひろふ　長濱

濱へ　濱のとまや　あさりすみ　濱風

小濱　なかれ貝　小濱のつゝみ　濱ひ

万六　ますらをハみかりにたゝしをとめらハ赤も裾ひく清きはまひを　赤人

ゞ七　住のえの岸ほ白波八来よする濱をとれハ清しも　読人

ゞ十九　松原の清き濱へよ更にかハ来る人きそのなこみ　八束

○潟　かた

汐のひるかた　さつひかた　沖のひかた　干潟の松

名所　象潟出羽　うらみ潟　清見潟駿河　松浦潟肥前

万七　難波潟汐干にたちてみわたせハ淡路の嶋にたつ渡るみゆ　読人しらす

ゞ十四　夏そひく海上潟の沖つ洲に船ハとゝめんさよふけにけり

○嶋　しま

八十しま　小しま　浮しま　たまねき嶋

河しま　あやしま　しま伝　沖の玉嶋

志まやま　浦の初しま　葦しま　しまかくる

嶋伝ひ　百つしま　あまさき　大しま

沖つしま　なしま　大和しまね　秋つしま

千嶋のえそ　池の中嶋　嶋かくれ　嶋きハ

島のはらきて　しまね　島松

名所　絵島 淡路　松の生原　玉津島 紀伊　中川島 陸奥

たかしまの 播磨　室のやしま 下野　まつしまのしま 陸奥

万一 あはぢしまいそこの崎へこぐ舟に妹のあたりにゆきましまゐきた　人丸

〃三 あこの浦をこぎ出る小舟粟島をそがひにみつつともしきか小舟　赤人

〃 玉つしまよくみていませあをによしならなる人のまちとはゞ　黒人

古 わたつ海のかざしにさせる白妙の浪もてゆへるあはぢしま山　〃

○湊　みなと

みなと洲　湊のせと　みなと田　湊の入江

湊風　みなと舟　湊入の舟　湊に出る

年の湊 古今　袖の湊 筑前　須のみなと　みなとかぜ

水のみなと　背の湊　浦のみなと　きみのみなと

湊の沖　八十の湊

名所　あかしの湊 播磨　由良湊 紀伊　多けの湊 丹後　袖湊 筑前

万三 わが舟はひらの湊にこぎはてむおきへなさかりさよふけにけり　黒人

〃 磯のさきこぎたみゆけばあふみのみ八十の湊にたづさはになく　〃

〃七 天さかるひなにあらぬをみなときの湊の湊にたちさへむ　読人不知

○津　つ

ふなつ　八十の舟津　舟よそひ　はまよる舟

名所　難波津 摂津　こ津　志き津　高津　梅津 山城　大津 近江

五一 にきたつに舟のりせむと月まてばしほもかなひぬ今はこぎいでな　額田王

○崎　さき

磯のさきはま　せとの崎　尾崎　みさき

島さき　いて崎　小島か崎

名所　ゆらの湊 紀伊　淡路島 淡路　難波の湊 摂津　志賀の浦 近江

五一　くしろつくたふしの浦にても　かけよ大宮人の玉もかるらん　人丸

〃三　浦つたひぬめ引浦をまつ宮こゝあ八大和恋しくたつさは鳴　赤人

○磯　いそ　礒

入ぬる磯 波のさし也　磯がくれ 磯のかげ也　磯づたひ　ありそ磯

いそわ　沖のあら磯　磯まくら　何その磯や

磯やかた　何の磯べ　磯松がね　いそ菜

○沖　おき

沖津浪　沖のかしま　沖津島　沖津玉藻

沖つ汐さゐ　潮満来る汐さゐ也　沖津白波　沖つ風　沖中川

○淵　ふち

岩淵　かた淵　青淵　みなの淵

岩垣淵　青の淵　深の淵　冬の淵

石走の淵　底ひろき淵　みなれさをさす淵

○瀬　せ

上つ瀬　中つ瀬　下つ瀬　後瀬

かはら瀬　のぼり瀬　くだり瀬　沖の底瀬

早瀬　浅瀬　いく瀬　高瀬

川瀬　岩瀬　瀬ごえ　瀬きり

やれ瀬　瀬ゝに浪折　せゝなみ　よど瀬

逢瀬　恋しき瀬　くまき瀬に　瀬々く

○迫門　○門　せと　水戸

せとわたり　せとの舟　瀬戸の落あひ　瀬戸の入江

瀬戸の浪よけ　流の瀬戸　せとの汐さゐ　せとの満る

名所 速吸の瀬戸 豊後 薩摩瀬戸 音戸瀬戸 周防 明石ノ門 播磨

○灘 なだ

あらき海 灘の塩風 灘の塩やき 灘の釣舟

灘見 あらきの灘

名所 難波の灘 摂津 芦屋の灘 明石の灘 播磨 ひゞきの灘

○洲 す

中つ洲 みなと洲 しら洲 鳥のゐる洲

中洲 洲さき 川洲 あら洲

○渡 わたり

わたし船 かち渡 よわ渡 秋わたる

夕わたり 渡りを幸く 舟よそひ

○泊 とまり

とまり舟 波のとまり 夜のとまり うきね

かぢ枕 波まくら 旅寝 波のまくら

名所 三津の泊 摂津 むろの泊 播磨 明石の泊 唐琴泊 備前

○瀧 たき

おちたぎつ たぎちながる 瀧浪

瀧つ瀬 瀧川 瀧つ早川 瀧のいと

瀧のおと 瀧のしらき 瀧の岩波 瀧の水上

瀧の玉水 峰の瀧つせ 瀧のしぶき 瀧のしらいと

瀧つ流れ 瀧の水 瀧まくら 瀧のみなかみ

ちくさの瀧 袖の瀧つせ 雲井にひゞく 雲井より落る

こゝも岩ね 人のこゝろの瀧 岩そゝく瀧 石そゝく瀧

岩ねにひゞく 瀧のそこ 雲にあまかる 岩にせかるゝ

せき入て落れ　瀧の糸つね　絶ぬる瀧

名所　布引瀧　摂津　清瀧　山城　戸無瀬〻　音羽瀧〻

那智瀧〻　鼓の瀧　摂津　音羽ノ瀧　山城　箕面瀧　摂津

百六　後の世にかくすみそ　うき身世の清きかなちの瀧つ上は　重村

〃　ちかきみ白ゆかしき落瀧つ瀧のゆくへは知らぬかな　〃

古　清瀧の世々の白にとふるあくしはけれおりてき御を　弁匠

〃　ちきちる瀧の白玉拾ひおて世のうき時の涙にそかる　行平

後　瀧の瀧之も名は拾きくゆくへ落る白浪の玉しけくは　は宮

〃　七文字数八久しく瀧そつくし夕をゆくとせそてなくよ　画師

拾　なかれる瀧の白にて絶えてはくるのむれ瀧とく新人　要之

〃　おちきくはみの瀧をちちそれいて山川のなる浪そなる　清長

六　いかにて数きし御落瀧つ瀧のをきすあつらし瀧玉　〃

○河

かも　夕川　山川　松川
谷川　西岩川　雄川　小川
いさゝ小川　まゝ川　まゝ瀬川　瀧川
ふかき川　河門　川之　川ふち　川よみ
川おと　川より　川くま　川よみ
川きよみ　川の瀬　川橋　川きし
川舟　川つら　みそ川　ちゝ川
これと川　川きしふち　川わたり　実川
ほそ川　川そひ柳　こつき小田　川よちきち　さゆく川
関　瀬　みきた　岸
まこ風　されそ　川井

名所 賀茂川 山城 桂川 〃 淀川 〃 音羽川 〃 初瀬川 大和
吉野川 〃 みなの川 〃 生田川 摂津 あすか川 大和 竜田川 山城
百三 むかし見し象の小川を今みれはいよゝさやけくなりにけるかも 旅人
〃六 石はしりたきちなかるゝ初瀬川たゆることなく又も来てみん 鹿人
〃二一 見れとあかぬ吉野の川のとこなめの絶る事なく又かへりみん 人丸
〃七 あすか川川よとさらす立きりのおもひすくへき恋にあらなくに 読人不知
〃 大空のみ山の峯にきる 細谷川の松のおとのさやけき
〃 うち川は淀瀬なからし網代人舟よはふこゑをちこち聞ゆ
〃 いまよりもかくやつれやゝ此なる川の清き瀬のとを
〃九 くるしくも暮行日かもよしの川清き川原を見れとあかなくに

○淀 よど
川よどみ 七瀬のよど よど瀬 よどある屋

よど川のよどむ

名所 六田の淀 大和 高瀬の淀 山城 大井の淀 山城

○岸 きし
うきし はきし 岩きし 河きし
山きし 岸のひたひ くづれ岸 谷てのきし
まさきの岸 岸ね 岸かげ きし田
岸うつ波 岸の柳 岸の下水 岸のうまや
岸の岩ね 南きし 岸のくれ竹
岸の山吹

○江 海も川もよあり
ふる江 入江 山もとの入江 汐の入江
浦の入江 ほり江 細江 さゞれ江

玉江　江のみ　江の波　入江の山

ふる入江　入江の松　ふかき江　あし

○まこも　菖　何やえ　みさご

名所　難波入江 摂津　引佐細江 遠江　玉造江 常陸　玉江 摂津

万四 みなと江の入江はほきる芦原川のあれたるくし友なしはく　旅人

六 風ふき八江ふくもさもろすま菖ね細江は浦うつの　赤人

○沼　ぬま　ぬ

みのゝまゝ入江沼沢池よりほそ流ね大きに沼なし

うく沼ぬ　こもぬ　みぐり沼　流れぬ沼

岩垣沼　沼の入江　沼水　こぬ方

ぬなは　何やえ　まこも　せり

菖　あし　藻　浮草

みなもおほし

名所　いかほの沼 上野　あさか沼 陸奥　浅沢沼 摂津

○澤　さは

野沢　山沢　沢辺　沢水

沢田　あれ田の沢　入江の沢　沢の水汁

菖刈沢　ふる沢鴨　みさご　茅原

招芹　小菜

○池　いけ

名所　猿人沢岸　大沢　広沢　浅沢 摂津　みよしのの沢 武蔵

いくのところ　池の面　いけ原　池の水は

池のさゞ波　池のみぎは　池のさゞ　池のつゝみ

やもの池水　池の玉藻　すめる池水　庭のさゞれ

池のおもて　池のみきは　みなそこの池

名所　益田池 大和　廣沢池 山城　狭山池 河内　こやの池 摂津

万四 にほ鳥のかつく池水心あらは君にわかこふる心しめさね　よみ人しらす

三 から人の池のうきにすむをしの[illegible]ねもこそなけ秋をまつらむ　[illegible]

十 わきもこかねくたれかみをさるさはの池のたまもとみるそかなしき　人丸

拾 てるまゝにふく松風ハ池の水にたつしらなみのけさはさえつゝ　兼盛

古 猿沢の池もつらしなわきもこかたまもかつかは水もひなまし　帝

○堤　はくみ

池のつゝみ　堤くつる　つみむし　人目つゝみ

つゝむかな　つゝみはく

○井　ゐ　ゐる

山の井　岩井　桜井　井筒

あか井　ちよあり　さしみ井　とよゐハ井　いさら井

やく　くむ　すむ　にこる

底　むすふ　みくは　燕

清水

名所　ほりかねの井 武蔵　せかゐ井 摂津　清めか井 吉

万一 山のへのみ井をみかてら神風のいせのをとめとあひみつるかも　長田王

九 かつしかのまゝの井みれはたちならし水くましけんてこなしおもほゆ　よみ人しらす

十六 あさか山かけさへみゆる山の井のあさき心をわかおもはなくに　采女

○水　え　河　み

みかは水 禁中　よるへの水 神の社の　さゝれ水 小石の間行水　埋水

わすれ水　水かけ　水のも　山水

岩水　川水　いつみ水　沼水

江水　清水　不清水　玉水
下水〈なかの名〉　まし水　やり水　落くる水〈俄にふる のことく〉
水の面や〈波の文〉　みなれ　ふるき〈水掛之〉　みなわ〈水の泡〉
水筋　水ぬるむ　瀧の水　そてひつ
水かゝみ　水草　よくれ　みなきる〈水のさきよ〉
岩波　さゝら水　水ひき　水むすふ
雪げの水　水のつゝ波　たゝひの水　苗代水
水のまさ　水かれ　井の水〈岩井 筒井 走り井〉　水の秘と
うけひの水　落たる水　岩そゝく水　やきたる水
ゆく水　瀧きの水　瀧よとの水　泉の水
渚の水　秋の水　みなひ
名所　井出ノ玉水　岸　瀧　清水　関清水　等

六　水せきもはてゝをしもらす六藤家の水のあはとみえて　諸
〃　ふりつもるかたのなみ々やあふりし人の絶て寄る　〃

○堰水
みなきき　みなく
六　因はまくら／＼のせきとめてよ水のきえとは
六　大井川みなきをさへて汲水の絶ても故きを思ふ
〇浪
水浪　さゝれなみ　さゝ浪　千里の浪
老浪　あら浪　浪の音　波のあや
淺浪　波の花　さゝれなみ　ひら浪
志きなみ　瀧なみ　あら浪　ゆく波
波のよるひ路　波のさゝわき　岩きる波　浪かけ
浪をさゝする　よるくる波　いさよふ浪　さゝる波

芦べの波　霧の浪　雲のうき浪　ゐて立浪
礒こえ波　あらいそ波　沖まきれ波　さつなく
よるの浪　なごろ　海の浪のおもきえ　藤浪　ちひくをたてよせくる　波のひく
百七　あまのはしたて浪ぞくらしあまさのをかれとも波立ちぬる　よみ人しらず
六　風ふくる波の礒ふ八重のそともえしらね谷のそこにはく　無く

○潮

うしほ　入しほ　汐さかり　汐みれ
志ほる　汐むかふ　みちしほ　汐のま
しほしむ　沖つしほ　汐あひ　汐の八百合
汐干　汐みちり　志ほみち　しほ本
かたしほ　ひきしほ　うらしほ　汐みなと
汐さゐ　汐さきさゐ　こしほ　やくしほ　汐の入江

汐干　汐みち　汐ひの磯　朝こしほ
夕しほみち　うら兄

○温泉　いでゆ　清湯

名所　走湯 伊豆　七久里の湯 信濃　伊餘の湯 伊予　摂津 有馬の湯
後拾遺 いづる湯のまくにつける白糸ハくる人もたえぬものぞありける　読人しらず
千 見つらくも清き都の八志ほ有る出湯の先に　読人しらず

○國　くに

皇太清國　皇清國　神の清國　豊清國
大やまとの國　やまとの國　しきしまの國　葦原のしまの國
葦原の中津國　日高見の國　出雲の國　大やしま
やまと島根　うらやすの國　おきつしま　秋つ洲
やすくに　秋津島　秋津國　玉垣の内つ國

うごきなき國　みちのおくの國　國中　國の風
國みん 語き而より至むそ　このくに　人の國 他國之　ことく國 他國之
まもの國　まとめる　國まもる　とつ國
此世の國　ねの國 底のねの國　青き山のやまと　から人の國 もろこしの事
つくしの國　あつまの國　ひなの國　國もせ 國もせまく之
なのかれよしのなかに廣き所をほしく國といへり
萬三 しき島のやまとの國ハことたまのたすくる國そまさきくありこそ　後人麿
〃廿 いさ子ともたはれわさなせそあめつちのかためし國そ大和しまねハ　内相藤原朝臣

○都　みやこ　京師のこと之
えはと　都のうち　大京ところ　都路
都の大路　都うつ　都へ　都人
都のよそり　都のつゆ　ふるき都　國の都

花の都 諸書之　仏の都 伊勢　山寺紀都 寺院之　ま心の都
冬の都　月の都　雲の都 佛之　九重のうち
玉しきの都　内りさん都　ひさしの都　すめらきのおほみやの都
都のうち　都のよる　都のすかひ
萬三 あをによしならの都ハさく花のにほふかことくいまさかりなり　小野老
〃 やすみしゝわか大君のしきませる國の中にハ都しおもほゆ　大伴四綱
〃六 あをによしみやこかくとふ此の山附のゆそれハ都となりぬる　よみ人しらす
〃十九 大君ハ神にしませハあかこまのはらはふ田ゐを都となしつ

○古都　○故宮　ふるきみやこ
大宮所　志賀ノ都 近江　あれたる京　近江都 南都　寧楽都 奈良　藤原都 大和
〃 よしのゝ宮　ならの都　ならの都のあれまくをしも　ふる國
〃六 世の中を常なきものと今そしるならの都のうつろふみれハ　よみ人しらす

万一 いにしへの人にわれあれやさゝ波のふるき都をみれハかなしき 黒人
〃 さゝ波の国つ御神のうらさびてあれたる京みれハかなしも 〃

○禁中

雲の上　くもゐ　雲ゐの庭　はしのもとへ
こゝのへ　とのつかさ　紫の庭　九重の庭
中のへ　外のへ　きさきのかな　萩の戸
梨つぼ　梅つぼ　桐壺　みその子
みかきね　みかきもり　衛士のたく火　左近の桜
右近の橘　御垣の内　玉のうてな　大内山
玉のきざはし　南殿の庭　南殿の大床　よるのおとゞ
はこやの山 仙洞　霞の洞　仙のみやつこ　夜もすがら清め

万十七 たゝなめていづみの川のみを絶えずつかへまつらん大宮ところ 境部老麻呂

〃六 ふるさとゝなる山やまのみおいつるハかハらぬ代々かすらへぬ大宮所 よみ人しらず
古山川のむかしのあときゝとめ みきよしや伊勢
○かくしきのいむひく世中のうつりかハるハ此歌のこゝろなり
みくいうしへハなし

○故郷

ふるさと
故宮をさし又家もをさめし里をもいふあり 旅にありて家をさしふるさとゝ
ふるさとゝいふも古へハなくさハ国又家あるといへるハ古へす
のおもハよむへきハ後世のうたハあまり侍るべし

ふるき都　古きみやこ　むかしおもふ
とふる里　ふるたとく　むかしわすれぬ　住なれし人
むかしの宿　むかしの里　ふるき里　住ちらしの跡
志のぶ草　軒の松かえ　あれし我宿

名所 深草郷 小野の里ヾ なき(?)嵯峨 大原の里 郷 上志賀郡

百三 深草の原つゆけくれも行へ(?)とふかき里の秋やたゆるかな 旅人

〃六 あはれ(?)の花ちるはあはれとおもふなりなき(?)の都をみるくしよしも 坂上郎女

古 山里はものゝさびしき事こそあれ世のうきよりはすみよかりけり よみ人しらず

〃 尋ねきていかにあはれとながむらん古里(?)さくは(?)雲のそこぞかはりゆく(?) 寂然

後 稲のくだるめぐしもとめる里の師(?)まてる(?)はなき(?)はなかるらん 能宣

拾 いにしへは行すきてこそありけりつれなる(?)ぬれとひてきかるや 躬恒(?)

後 やへむくらしげれる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり 恵慶(?)

〃 岸をひきし松とあれはそくふかき里は人めもなし 素性(?)

子 むかしみし松の稲(?)はそれながらむかしのつきをさしてける 公(?)

○水郷

うつ(?)の里を(?)小川への村と(?)あるまじ(?)も見る水への名所をとる

にほひくる里のなかくてもくるかり(?)ゆきの(?)ちきをかぎりよむへし

何(?)つゝの里 何(?)の何(?)と 海人

みさきハ よるの(?) 天(?)人 よる秋(?)

入江 涙(?)のみる 浅(?)の 業つむ(?)女

いさよふ(?)なみ 川 辺

名所 宇治川 郷 桂のさと 桂川ヾ 大井川ヾ 立田川 大和

さほ河ヾ 生田川 摂津 玉(?)路江ヾ 難波江ヾ 志賀の浦 近江

万九 新(?)勅(?)撰(?) まきけハたるけし泉川 なきの(?)渡り(?)なるふね(?)人 よみ人しらず

新古 久かたの月の桂の里なればひかりをのそれむかるゝなる(?) 伊勢(?)

さくらちる(?)夜の郊(?)の河きの岸かもつれもなくの葉の(?)ひろ 業平(?)

○郡

てほつま(?)

名所 野路の野 近江 水上の野 丹波 狭布の野 陸奥 入間野 武蔵

六 わか衣なるひその野のみかりに恋てそくる人あらなん　よみ人しらす

ゞ 天つみかきのひ(甲斐)へそ古里ハけふの野の水にすみける　忠岑

○里　さと

さとわ　ふるさとの里　すその里　谷の人のさと

みなひの里　はつせの里　山ふもとの里　岸の住里

炭やく里　畑やくさと　ころもさと　里つさ

里ハあれ　里をはなれ　田つらの里　山里　山さとは人めも草も

いくさと　里の中に　里ひさし人のまれなる山のかて

こはると　里の一むら　すみなれし　里をすてぬ

名所　伏見里 山城　余呉里　まの里 大和　藤かやこの里　生田里 摂津

五一 花さかりあれにし里をすてていまは天の河にみなはてもあらん　寂然法師

四 若菜をつむ里ははるさきに人はすてて住ける　笠女

・七 清き瀬に宿りつつ山のかけのあさ川の源なるひの里　読人不知

古

六 春の夜は月にそあかぬ山里のあはれさのまさるすむ人のかはる

○村　むら

むらひの村　さとの一むら　里のひな村

江のむら　村のけふり人　あれ人の住る　入江の村　むらく

名所　十市村 大和　古江村 摂津　青柳村 近江　榎の村 摂津

○市　いち

都の市　市路　山もとの市　東の市 都の

国の市　里の市　市人　市女

市のかや　さわく市人　つとふ市人　市をなむ

市姫の神　世わたる人　市せきまつ　あきく人

市にいる　うき名　うき　かず
数ならぬ　うき身　かゆる　さわぐ
ハそく　おや(?)　茶にハ塵
名所　辰ノ市　立田市　椿市　三輪市　かるの市
あへの市　飾磨市　志のはせ市　標津　磐余市　尾張の市

拾遺　なき名のみたつの市とハさわげともいさまた人をうるよしもなし　人丸
子　恋をせはまちの市にそまじりなん人ぬおもひの身をやかへてん　後集

○山家　山居　山館　山亭

山家ハ山住居する家を云　山深く住むといふ事なり
家あまたある所にハあらず　さびしく物すごき所をいふ
隠れ家するを山居といふ　又云家の字ハ多くは山
居住するの意にハ山居とよむべし

松の戸　松のあらし　竹の戸　竹のかき
柴の戸　柴の戸の内　山の庵　宇の庵
山住の庵　身をかくし　かくれ家　山かげの庵
山の下庵　すむ山　谷の戸　柴垣
杉の庵　柴の庵　蓬垣　岩ちか庵
世をのがれて住　柴のあみ戸　苔の通ひ路　山ずまゐ
苔のしき庵　軒ちの松　野のまつ風　そともの岩
柴の袖垣　雲の戸ざし　竹のまき戸　柴のかよひ
山ふか　軒端の雲　岩の戸ざし　枕の山
まくらの路　枕の岩　深山ざと　松のあらし
竹のすだれ　いさゝの井　岩の庵　杉葉の軒
苔のむしろ　山の庵　奥山の庵　かけひの水

山さとつゞき庵　山ふかき竹の庵　うしろの山　まき山畑の庵
賤のおと　み山の里　すみ人の里　志業杉しく
かくれすみぬ　園生の山　深き谷　つゞきの庵より
世のうきめみぬ　人めの際　さびしき網て住　すみなく
すぎとはる山人　とふ人まれ　きのおく　ましられく
峯の庵

古　わか庵ハ都の辰巳しかそ住世をうち山と人ハいふなり　喜撰
〃　白雲のたえハ引く峯にたに住めハ住ぬる世に社有けれ　惟喬のみこ
六　山さとに住ましなりと思ふ人もいまハあらしの杉こそ偏き　よみ人しらず
〃　ゆきさやとる白雲にも思ふらハ此山さとハ住うかりけり　西之
〃　雪ふかくふりぬと思ふ山里に我もおほくの年をつもりぬる
ほ初　白雲の往ぬ人も帰りぬ山里ハ冬のあらしの杉をそよくらく　教実

〃　杉もひやけふく人もちかき山里のかけひの水のこほるほとを　中務
詞　大原やまき炭竈も冬ふかみ八瀬の里そこそへかへる　良暹

○田家

うつ庵　田つくりの庵　小田の庵　田中の庵
垣ねの小田　刈田の庵　里わの小田　門田
門田の末　門田の面　いなむしろ　あれ田の庵
山田まきせる笹の庵　稲葉のかり庵　山田守　いそきの伏や
ちりしく庵　落穂ひろふ　田面の庵　我門の稲葉
河のほとりや　むらすゞめ　あぜつくろふ　いなふきの山田の里
鳴子ひく　山田の庵　門前の小田　鴫の羽かき

万　秋田刈かりの庵に時雨ふりわか袖ぬれぬほす人なしに　よみ人しらず
〃　夕門はかる田をこれハ萩のつらの秋風たちそゆるかな

羽 ひさかたに山田かる身と生れなは我の心をさそひこそすれ　雄因
子 かた門のおくてのひつち枯そめて山ころの刈田に鴫そ鳴なる　慈円
ゞ 小山田の庵ちかく火のともしかけて稲葉もそよと鳴くかん　重長
ゞ えかこひなき紫の庵はこゝもとあれ稲葉そよく秋のまつ風　玉信
ゞ 稲妻の光のうちのもすゝろまて山田ちかくに宿を借りなん　良房

○家　いへ

家ゐしく　ふる家　家人　家のさま

家の風　家つゝり　家を出る　家つゝき

つくる家　家のそひ　めくりの垣　垂門さし

○庭○砌　には　みきり

庭の面　庭もせ　苔の庵　庭の千草　庭の木

まなき芝生あれたち　八重むくら　庭の木のあれたち　庭の松陰

紫の庭　庭のしき庭　庭田　庭つくり

みきりに到る　友とみきり　みきりの松　竹　まかき　植ゑる　人の作るまよ

百五 松の人ハてんしくせハや萩をひとる庭の玉ゆ角にを　詠人

廿八 きりあろ身もすそ門紫庭に秋風ふまくみハちかう庭　あ高王

○竹籬　ませかき

まのまかき　竹のまかき　古かきき　まかきの

まかきの山　まかきの庭へ　まかきの竹　まかきの小田

あらまかき　まかきのひま　古のまかき　竹のまかき

へたつる　ろうそく　ひもろき　外のまかき

○戸　とぼそ

吉木の戸　松の戸　桜戸　杉の戸

あみ戸　外の柴の戸　柴の板戸　柱の戸　玉の戸　紫の戸　つま戸

里の戸　やり戸　くゞり戸　朝戸出

夜戸出　外の戸　竹の戸　萩の戸 禁中也

峰の戸　戸さし　とぼそ　あく音

さゝく　閉る

○窓　まど

まれひの窓　山窓　まどろし　窓かゝま

窓のうち　窓の竹　窓の梅　まどの前

まどの雪　まどあかり　杉生の窓　東の窓

南のまど　窓すゞみ　小すだれ　窓のともし火

窓のかげ　窓の月影　窓の雨風　うたゝね影

さしあけ　窓に入る風　何くる　あくれ

とられ　さし

○門　かど　かれと

ゆふかど　妹が門　松の門　杉の門

柴の門　法の門　門さゝ　門より

海門　いそ門　作あけつ　杉たてる

草の門　黄金門 不閉門之　くあぬ門　門かる

門のさし入　天の岩門

○隣　となり

まろ隣　隣きらゆる　隣の杯 むかひ　隣の影

となりの　なるひすむ　隣の人　中たき

背の隣 其れ之　隣へ行かる　垣こし　窓ごし

隣こえる 定之　秋の隣 之の事之　まがきのへだて　芦垣のへだて

新てき

六 植ゑしにされはひらし桜ぞねてあれは風はふきとも吹きもせず　伊勢
〃 桜を植て家のうへんとや六條あのさきはひともやしるとて　まさん さゝあ
え植る 冬枯は中植ありてもやとをへるてもあれくや花も見えさらん　躬恒
、植ゑし花のみくたすける梅をわくても梅の匂ひし来れ　とし枝

○菴　いほ　いほり

草の庵　松の庵　杉の庵　笹の庵
柴の庵　竹の庵　つきの庵　山かげの庵
ひとつ庵　民の庵　うつの庵　田の庵
下庵　峯松杉雲雪月も 山居になしられあり　庵さびむすぶ　流くる
すむ　あらし　かりそく　ほそ庵　猿の庵

○閑居　○幽居　○幽棲　○閑中

て行の組の旅しく法出てきんすあれハ山居の心をよむる

山ふかみうき世の中の住居にもなをいとふへき世のうきもかな

ハ庵り

世のうれひ　えの経　とひぬ翁　世の外のやど
苔のむしろするすむ　よもぎふの花　雁ハ新古ゆるす
庵のはしら　八重むぐら　翻てさひしき　庵の松竹
庵をよふしきれぬ　あらしにきられぬ　風のこゑてなきあれ
門の松の中と　すの子の庵　柴の戸　何ぞしむ
世をいとふ　すのうくひすや　さらはぬ庵　ぬまきうれぬ
なる花やと　草の戸さし　人め稀な庵　松の梢し
庵するこれむ荒　つもりたれども

古 心こそよふへき人もかくれ家へ庵して門もせさてへ　信人 家
指 ハそかハ君の事つりんよきさふの人は通ひぬわかやどの庵

子　岩そゝく水よりかみにきこゆなりんひとつ寺しておろすかね　為兼
〃　わか世にかき世をへて志のふハひとりゆくへき松の風かな　寂蓮
続後　山寺のよそのね入まちかねしにくる鐘の聲にそきくきく　定家
〃　誰かまた思ひ絶てもうきよのはかなさ風ハふきし　定家

○寺　○古寺　○蕭寺

みてら 山寺 里寺　ふるてら　大てら　かねてら
峰寺　尾上の寺　ちかてら　寺ふかき
法の寺　法の城　法の庭　寺山ち
穂山てら　山ふかし 奥寺　みくるのかね　みねのかね
あま寺　河寺　志きみつむ　葉つく水くむ
法のともし火　あまの松　墨染の袖　尾の松
かゝるむかし　なくほのし　法の師

名所　雲の林 山城 雲林院　初瀬山 泊瀬　花山寺　高野山 紀伊
横川 近江　志賀の山寺　難波寺 摂津　我立杣といへハひえの山ち
すへて寺又古寺といふもかゝる名所をよめハ寺の縁となれへとも
続後　岩けき谷にみをぬるはうけひの水のゆくへにてこそ　能仲
〃　つらくみるトわかれ寺は入あひのかねの音斗しく　仲実
〃　はるあきさつる法のかねさきぬかみそくとつゝめれ　俊頼
〃　やくそむハつねてゆくへ法のまな名をきく河ハ浪やすみゆく　家隆
新古　世をそむく我よりのちハ岡あミのもそてハるゝ春かな　西行

○木　き

立木　みやま木 深山木　志け木　うもれ木
やとり木　舟木 埋木 うき木　わき木　かる木
つち木　ころ木　とたて木　うれ木

朽木　そま木　老木 ふる木　足木
かれ木　流木　うもれ木　枝木
木立 末木　うゑ木
風寒き音もなかりけりは八はしもかなきるる末高のうへ　吉延
桜ふくかせのちくさ音きよれハあらしの花のさかりのはらる　能因
六 梢ハてぬらの花木有るを是ハ桜木のうちよそれとそ見る　尊之

○枝　草木　え　えだ
ほつえ 上枝　中つえ　しつえ 下枝　さえだ 小枝
まひえ 行枝　みつえ　から枝　百枝　一えだ 一枝
枝もとをゝにも　枝うつり　いもえ

○梢　こずゑ
やどの木末　彩の梢　梢の色　人十ごえ
うれ 木末の末なり　木々の梢　梢の露

○松　まつ
山松 岩本の松 岩の松　そなれ松 磯馴松　岩の松 川島の松 川への松　ひと川松
時松 浦すり川　姫松 姫小松　小松 こまつ　老松 古松 古木の松
宿の松 影の松 うきりの松　ちきひ松　松原 末川原　岩ほの松
松のこよ 木ろ之　一本松 小みを なつ　門の松　庭の松 うゑ松
友なき松　松の緑　松のむら　松の二葉
松のみどり　松のこゝろ　松のおち葉　松のしら 松の戸 松の門
いつもの松　入江の松　松のこゝろ 深みどり　十かへりの花
むすひ松　松のよはひ 世を経る ときは　松風 すゞし　おおひの松
かくらぬるとき ときはかき八　ゆふ〳〵ときぬ　松のおもひ　松のことも
松のちり松のひま　松のそひね　岩ほよ松さん　松の陰 松の下 松の下風

松のひゞき　尾の上の松　松のむら立　松のつゆの葉
松あらし　ひとりの松　和歌の松　高砂の尾上の松　峰に残る
隣の松　松をめぐりの垣　千代の生末　人すむの木
万一 あられうつあられ松原住の江のおとひをとめと見れとあかぬかも　長皇子
〃二 みよしのゝ玉松かえハはしきかも君かみことをもちてかよハく　額田王
〃三 住の江の岸の松原遠つ神わか大君のいでましところ　角麻呂
〃六 玉きはる命ハしらす松かえを結ふこゝろハなかくとそおもふ　家持
古 我見ても久しく成ぬ住の江の岸の姫松幾世へぬらん　よミ人しらず
〃 ちはやふる賀茂の社の姫小松万代ふともいろハかはらし　敏行
〃 梓弓いそへの小松たか世にかよろつ代かねてたねをまきけむ　読人しらず
後 植しとき契やしけむ武隈の松をふたゝひあひみつるかな　元善
〃 花の色ハちらぬまはかりふる郷に常にハ松のみとりなりけり　雅正

○榊　さかき
さか木ハ一種の木ならずあまたさかえ木といふまでの本なれハ
ときはなる木ハみなさか木なれどもさてそのさかきといへる
木ハさかきおもありともいふ説あり
まさかき　ときはのさか榊　八重榊　榊葉　榊葉の手　色かへぬ
玉ぐしの葉　榊かえて　しめさす　ゆふつくる
榊とる
名所　神路山 伊勢　男山 山城　春日山 大和　岩戸山 同
後 ちはやふる神垣山の榊葉ハしくれに色もかはらさりけり　読人しらず
拾 榊葉の香をかくハしみとめくれハ八十氏人そまとゐせりける
〃
○杉　すき
玉杉　杉むら　杉もと　あや杉

杉生　かくれの杉　さし杉　杉むら山
杉のむらたち　杉のかけ道　二もとの杉 古川　神杉 みわの　杉 みわの
杉たてる門 鵜の　古木の杉　いなり杉　杉村 奈良　杉のしるし
杉のむらたち　杉かくる庵　杉の下庵　すぎ葉の杉
しるしの杉
名所　天のかぐ山 大和　三輪〃　初瀬〃　布留〃　平野の三島
万三 いにしへもかくきゝさひかぐ山のほこ杉がもとに苔むすまでに　鴨足人
〃九 神なびの神よりいたにする杉のおもひもすぎず恋のしげきに　よみ不知
〃十三 神南備のみもろの山にいはふ杉おもひすぎめや苔むすまでに　〃
拾 いつれをかしるしと思はんみわの山ありとしあるは杉にぞありける　躬恒
○槙　まき
槙のしげ山　槙たつ山　槙の古木　槙の下葉

槙の下葉　槙の末葉　槙の一もと　槙のたち枝
つまぎこる　槙たつ杣　槙たつ奥　槙山 あら山中
名所　吉野山 大和　三室山〃　初瀬山〃　立田山〃　志賀の山 近江
万七 あたへ行をすての山の槙の葉も久しくみねば苔むしにけり　よみ不知
新古 かくてきし槙のしげ山つゆふかくといつを月日のつもりとかみえて　隆実
○檜　ひ
檜たつ　しらきひの　ちかき檜原　檜原の杣
そよぐ檜原　檜原くもらぬ　檜原の奥　ひかりかねく
山本の檜原　三本まかる　名残ふかき　檜原すくる
名所　小倉山 大和　初瀬〃　三笠山〃　三輪〃
万七 みもろつく三輪山みれはこもりくの初瀬の檜原おもほゆるかも　よみ不知
〃 いにしへにありけん人もわかことやみわの檜原にかざしをりけん　〃

〃十寸の杖るまでも君があはれに思ふかな衣つゝめや 〃

○楢 なら

ならしそ　ならしは　ならの広葉　楢のひろ葉

ならの葉　ならの木陰

名所　岩田 大和　神なびの杜 〃　狭名の地 大和　伝聞の森 陸奥

良 秋やときはつ紅葉して楢の葉さへもおもしろし　俊子

〃 ならの葉の名におふ宮の神のましける時もなほ打ちはれる　枇杷 左大臣

新 神無月やならの葉かたさやひとたびはもみぢのまで　恵慶

○柏 柏 かしは

柏 ならの葉 かしは　柏 葉広柏　柏木

玉かしは 八重の柏木　かしはの柏木　柏の柏

あさかしはそ　去のて柏 ならの山の 柏のひろそ　葉守の神

名所 神山 山城　楢山 大和　三笠山 〃　み をすそ川 同(?)

万十六 ならの山の このてかしはの ふたおもて とにもかくにも ねぢけ人のとも　備前 文武天皇(?)

古 石上ふるの中道 かるかやの ふかくはれなくて(?)　よみ人 しらず

六 みのやまに はゝそ紅葉の あらそひし あはれも　恵慶

○厚朴 ほゝがしは

万九 わがせこが 捧げて持てる ほゝがしは あたかも似るか 青き蓋　家持

〃 すべらぎの 御代に 青き 玉の ほゝがしは　よみ人 しらず

○長 安柏 ながめがしは

六 人しるれ 女あはれて 古の うきねの ことを　よみ人 しらず

新古 都やぬ かるかやのことは 名も 知らぬかな　紀友則(?)

○栢 かへ

六 冬枯れぬ人の栢がけて 枯るれとそ 縁むすぶかへ　為家

新六 みなやする三室の山のくの手の枝のくぬぎ八雲ぞ生ぞする 光俊

○椿 つばき

玉つばき やつをの椿 をとめ山椿 みやま椿

つらつら椿 八千とせ 八千代 ふたせへん

八年も咲く椿 紫久ぬ色 すべらぎ椿 岩ねにまする

名所 巨勢山 大和 宍師山 玄境 讃岐

万一 こせ山のつらつら椿つらつらに見つゝ思はなこせの春野を 人足

〃 河上のつらつら椿つらつらに見れどもあかずこせの春野は 春日老

〃十九 おく山のやつをの椿つばらかにけふはくらさねますらをのとも 家持

〃廿 吾門の片山椿まことなれ我手ふれなゝ土におちもかも 広足

〃 足引のやつをの椿つらつらに見ともあかめや植てける君 家持

○桂 かつら

かつら 桂うらん 峰のかつら 桂かみち

ゆつかつら 岩ねかつら 桂を折 儒学 桂の底

月のかつら 月の中なる桂

後 あき風にいひつよけゝくの月のかつらもはなやちるらん 忠岑

子 みつ枝のかつらをさゝげもちて君がたに八重のまへそ久しきまでに 集抄

○橿 樫。 かし

さかし さかし かし木 かしの実

石井の上 奥山る 木のした かしの木

万十 よし川のゆきかた思ふ白かしの枝もとをゝに雪のふれゝば 人麿

後 河上のしらかしの枝もとをゝにおくしもやしもを見るべきとして こゝろ

新六 さゝれつゝ見えぬ四上山のかしの木のうつはりは川嶋子家持 衣笠

○釣樟 櫟ロ くぬぎ

かくぬき　かくぬき　さぬきぢ　衣ぬきかけて

五四 佐保川のよどのつらゝのとぬまなれてらつらし光り　大伴郎女

きくらくハさかくれたりし　せとうち

卅六 〽そら衣はちらの川ぞのくぬ未ぞハろ寺これハ秋のくれなゐ　家持

〽衣されのみ雲にすらふらぬ未世なかしけり我身之らり　西行

○楸

流ひさき　ひさ紀　岩のひさき　波まときく　楸の末葉

五十 志を咲く久木て流くいつらく子や落人るる人ちまし　読人しらず

〽十 信乃まづ行小路の流久木ひさしく末ぬ実にたのそれて

〽二 わらひめの大河のへのわか久木ひさしくハ咲らひんかも

○栗

さくらの　くり　やくらの　くり柴　枝くらの

○桑

実別しくり　落くり　はちまちて拾ふ

くハ桑　くそ

桑の葉　桑まゆ　くハて　まひ桑まゆ

そのふの葉　桑のいくかく　てらされて

五七 たらちねの母のその桑の蚕もねらく八衣にきるといふ物を　読人しらず

後 了中ゆのくやくさてわか世のほかく桑てきさ泣きさきそや　古今

○橡

つるばみのきぬ　しきぶみ　つるばみてしま　つるばみくらの

つるばみの橡　山橡の雲　つるばみ暮の袖　つるばみ絹

五二十 わくらばの橡の衣は染めやしのひくるしみてひやらるん　今成

卅六 はつかはつる衣きくのしも染まりけてはくけわれハぬる紅衣　家持

〽 あきれちる橡の衣のちきてさらぬ佛のつめと捨やせのまけん　西行

○榁　天木香 日　むろ

たまくらぬむろ　松にはふむろの木　磯のむろ　浦ね　岩ほにそゆる

万十五　はなれそにたてるむろの木うたかたも久しき時をすきにけるかも　よみ人

新六　しほみつる浦のむろの木そなれぬるむろの木のそなれぬるも下葉おちて　家良

○合歓木　かうかの木　ねふ

万八　ひるは咲よるはこひぬるねふの花君のみみんやわけさへにみよ　紀女郎

〃　わきもこかかたみのねふは花のみに咲てけたしも実にならしかも　家持

新六　山ふかみいつかおもはてぬるねふのはなさきかゝる木は人をまつらん　光俊

○槻　ゆはき　清き　百枝つき　つきのはえ　さかきるて

万三　とく来てもみてましものを山しろのたかき槻のむらちりにけるかも　黒人

〃十一　天とふやかるのやしろのいはひ槻幾世まてあらんこもりつまそも　〃

○楪　ゆつるは

○草　くさ

くさまくら　旅くさ　くさのうら　山くさ　田くさ

わかくさ　新くさ　くさのはら　みくさ

はつくさ　くさの　くさむら

くさのもと　くさのゆかり　くさむら

民のくさ　はら　くさの　くさのかけ

芝くさ　いはくさ　も　薦

すけ　しのすゝき　わすれくさ

ちはやかそ　みくさ　和布　海松

○蓬　よもぎ

蓬が杣 浅く生まへ　かくれなる　よもぎ生　よもが杣 よもぎふのやど

やまよもぎ　蓬が本　蓬の門　蓬がやど

門のよもぎ　麻の中の蓬　蓬のまろね　世の中の蓬

六 かれもちかよ[illegible]もやどる[illegible]かくれ[illegible]人は[illegible]も　読人しらず

新六 [illegible]かくの[illegible]よもぎ[illegible]のけ[illegible]　衣笠内大臣

〃 [illegible]あくへ[illegible]蓬[illegible]　知家

○葎　むぐら

むぐらふ　八重むぐら　むぐら生　葎のやど

むぐらの門　あさみかく　あれたるやど

石四 [illegible]時よ[illegible]妹を[illegible]入[illegible]　田村ちう懐

〃十一 [illegible]　よみ人しらず

てら　むらきれ　あさ　ひうけ

木賊 とくさ　浅沼 ぬまる　かつよる　すまひ草

はくゑん　さぐく　はて　うらみ草

さしも草　えのこ草　うれおなき　莞 おかみ草

苻蓍 あさく　絡つれき　ねなし草　黄蓮 かくもる

藺 [illegible]　苦丹 くらん　水葱 なき　葈葛 をはき 又 蕕をはき

酢漿 かたばみ　菱 ひし

○苫　とま　け

はなうけ　むしろ苫　苫のむしろ　苫の衣 苫の袖

苫の下露　苫よぬらさき　苫のまくれ　うけ絵

かりねる　苫のまくら　苫のあらき　すみの苫 日うけ之

六 [illegible]苫[illegible]八年の[illegible]　ミつね

○萍 蘋 ロ うきくさ

根さしとめぬ　根をたえて　身をうきくさの　よる人さへもなし

うきくさの　沢 池 湊 沼 池 江　川なとにそへよめる

六 ときは衣のうらひき袖はくれぬなりのうきてもなにかあらむ　よみ人しらず

〃 ねをたえて水にうかへる浮草の池の底までもたのむなりけり　伊勢

○蔓 かつら

玉かつら 玉ハ褒美詞也　さねかつら 五味子　はふかつら 青つゝら　あまかつら あまかつら 天蔓之

正木のかつら　いはひかつら　たまきはまき

六 いはまよりおふるかつらとよそにみしなれもみとりの色はかはらし　読人不知

〃 なきわれの立田の山のさねかつらくるくる人はあはれひけん

○茜維 ひかけ　ひかけのかつら　ひかけのいと

後 ときはなるひかけのかつらけふしこそ心のいろにふかくみえけれ　伊尹

六 うちむれてひかけのかつらかけてけりかはるところのあはれかなしき　よみ人しらず

新古 かみ人のかくるひかけのかつらこそ天てる神のひかりそふらめ　家隆

○蘡 草　はつら　うらもひらをし

まつら　浅つら　くまつら　赤なる

くる　たふ

六万 山たかみ岩ねにはへるまつつらのゆくへもなくはすしもあれ　読人不知

〃古 山川のほとりにはへる青つらのたえすしもあれ　家持

新古 長きよもくるしのかのまつつらふきそひ渡るなれ　家隆

○莫鳴草 なのりそ

俗に人馬なともはさいふといへと

ちはやふるのなにたまなれ　ほたかれ　皮はゆるく

新六 捨らいはまにおふれのなそのそれとしられく身はなかりけり　家良

○紫　むらさき
むらさき　若むらさき　ふかむらさき　色むらさきよ
紫のゆかり　紫の都　ゆかりの色 古今伊勢　白むらさき
根すり　根すり衣　すれる衣　灰さしゝ
名所　むさし野　浅くなりにし　櫻井　河内
万十 むらさきの根はふ横野の春野には君をかけつゝうぐひす鳴も　よみ人しらず
ゞ一 あかねさす紫野ゆきしめ野ゆき野守はみずや君が袖ふる　額田王
古 紫のひともとゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞ見る
○菱草　三稜　みくり
六 浅くこそ人はみるらめみくりの水こもりねもみぬ人の恋はまさる　読人不知
貴女 さやけき池のみくりのねをしみてくるしき人のくるを待つ　出羽後
ゞ ねをふかみくるしきはさてもなほ行ゆたにつらくなき人の心　知家
○芦　葦　あし
浅のはむ芦　夜ごもりのあし　ちりれ芦　むら芦
こもれあし　下ゆく芦　浦芦　みだれ芦
芦のかり根　芦のわかば　かり葉　芦の穂
六 芦べのおひて時よりてこそ人とも思はされ頼みける　よみ人しらず
ゞ 津の国の難波の芦のめもはるにしげき我恋人しるらめや　貫之
○藻　も
万一 うちそをおみの大君あまなれやいらごの島の玉もかります　読人知
ゞ十一 みなそこにおふる玉ものうちなびき心をよせてこふるこのころ　読人不知
○蓴　沼縄　ぬなは
万七 わがゆるはゆるのうきぬなはへてもおきになよわたりくすきき　よみ人しらず
○菅　すげ　すが

吉菅　岩小菅　志ら菅　すゞ小菅
ひ小菅　山菅 川菅　しげる菅　みくまの菅
菅の根　ますげ　志つやの小菅　ねやの小菅
万七 妹ゆゑにめ菅の根のとかけに我ぞ見るゆゑまぐひしく此日さへ今日　よみ人しらず
ゞ十二 こもり人の笠にぬへてふ馬菅あり　て浪すゞあをそんとぞ思ふ
新六 菅の根のながきよすがらの居里をふる讃ぬる忘れ　紀実
○木綿　ゆふ
浪ゆふ　こくまの　わけ来さん　ちまとき　花
万四 みくまの浦の浜ゆふ百重なる心は思へとたゝにあはぬかも　人麿
ゞ六 おくれゐて人を思ふに志での浜ゆふかつゝきも志らすあり　丹比屋主
○藍　あゐ
何かとハナすへての染草の名なるを　ちゝとつくるにゆゑこの
あをきゆゑ何のことのふハあると用ゆる物なれハ杉のつゝ此草の名となき
紅かへり山藍ハ山に生ふる草にて又一種也からあゐハ紅之
○紅　からあゐ　くれなゐ
ちしほのそ　やしほのそ　末つむ花　ゆひさ　末つむ花
万十 よそのみに見てやこひなむ紅の末つむ花の色に出ずとも　よみ人しらず
ゞ三 わかやとにから藍まきおほしかれぬれとこりすてまたもまかんとそ思ふ　赤人
ゞ七 秋されハうつしもせんとわかまきしから藍の花を誰かつみけむ　よみ人しらず
○忘草　わすれくさ　萱草なり
万四 わすれ草わか下ひもにつけたれとしこのしこ草ことにしありけり　家持
古 住のえのきしにおふてふ忘れ草人の心ゆゑはいかにして　つらゆき
○忍草　しのふくさ　垣衣なり
古 ひとりのみなかめふるやのつまなれは人をしのふの草そおひける　貞登

六 花すゝき穂に出しいもやとの思草おもふつまさへこそみる　伊勢

○思草　おもひくさ

なかなかひとへにしてあれと思ふ事なく我にしけるらん

ちかひへしとて下心に物思ふはいへる

万十 道の辺の尾花かもとの思ひ草今さらになにか思はむ　読人

○篠　しの

玉さゝ　小さゝ　小しの原　しの原

篠生　笹の庵　小さゝま　笹原わき

野への小さゝ　あさのしの原　野への小さゝ原　さゝわくる

岡への小しの　しの原　しの垣　笹の戸

しとさやく　ひとふし

名所 みつれ里 有馬 嵐山 伏見の原

六 笹の葉のさやくをきけはみよしのゝ山の八十ふしうつりける　更之

ゝ 玉笹の葉分におけるしら露の今幾世へんかたもしられぬ　伊勢

新六 しのゝめのうたかたはえてはなれぬるなにそかなしき　光俊

○竹　たけ

くれ竹　なよ竹　わか竹　笹竹

呉竹 桂 なよ竹　志の竹　竹すゝき 竹垣

いくよ竹 入相竹　むら竹　一よ竹　竹の葉 竹の園

いさゝむら竹　竹のはやし　みきはの竹　竹の園生

竹の小枝　竹の下風　竹の末葉　竹のはしき竹

竹のかう紀　竹の下風　竹の葉の身　ちひろの庭

竹のはけさ　竹のかつえ　竹の枝　一もと

ねさし　ふし　うらわか　きりきり

ちかひく　おとつれ　下折

万　わかやとのいさゝむら竹吹風のおとのかそけき此ゆふへかも　家持

良　ころ〳〵八ぬ名をたつくろ川竹のいつれのよにか秋をしるへき　よしつね

古　今更になにおひいつらん竹の子のうきふししけき世とはしらすや　みつね

六　千世ふへき竹の林のいさきよく君か為には八ちよかけてむ　兼之

〃　名におはゝたゝ竹の子もさかえかし竹の林のかすもかはらぬ　後人

〃　うきふしは竹の子とよみし竹のうら葉にかゝる露のいのちは　元長

金　なよ竹のすゑもなひかす風ふかはかくこそみゆれ　公実

文應　かけたけはゝかりてうつる竹のよしもなくみちを知らぬ　順徳

〃　さきたつる竹の枝葉しけくこそ世のためしにみえけれ　家隆

〃　くれ竹のふしのよのまにおもふことしけきことのはなれとも　頼重

○鳥　とり

おほとり　小鳥　ひなとり　むら鳥

めつる鳥　かへる鳥　百千鳥　ゆふ鳥　鳴とり

まとり　みれちとり　ねくらとる　入江の浮鳥

もゝ鳥　むれたる鳥　鳥なき　鳥のね　さへつる

みなれ鳥　ねよゆく鳥　ねをなかれ　天とふ鳥

六　ひろかる鳥のなきちかへるとは八十声なきになきしたり　業平

〃　入日さすやさかの村鳥の林のうちにねくらもとめてなくなり　業兼

〃　夜川のひかりの芝をあさるしつきむれたる鳥のこゑそさわかし　ことえ

○鶴

うれつる　友つる　ひれ鶴　こゑ鶴

あしつる　よるみ鶴　さつね　まなつる

たつけ　むらつる　子をおもふ　おちつる鶴

万代のあそ　千世の父　鶴の毛衣　ますらを
あさかほ　片なちく　葦鶴　松にすむ鶴
鶴のむれゐる　つえ片の霜　入江　河辺　柳
とんて　浜崎　舟に峰　なける　かける　天とふ
潜てるり

名所　若の浦　紀伊　なにを浦　摂津　住江　須磨

五三　桜田へ鶴なきわたるあゆちかた潮ひにけらし鶴なきわたる　黒人
〃七　難波かたしほみちくらしあま衣たみのゝしまにたつなきわたる　読人不知
〃　わか舟沖にたゝよふ蜂鳥か浦によせける入江
〃　浦風ふくかたにをてのほるにあそふつきそのほる峰　家隆
〃　なき舟江の入江にあさる行とものありつゝ友なしはく　基俊
古　よろつよをまつにそ君をいはひつるちとせのかけにすまむと思へは

〃　河内川のきし川へをこて風にまかへらぬ浪うちてみれは　貫之

○雛
こかひ　にたとり　とハつる
はつかす　ゑさかけ　ゆふ霜にたちはなれ
ほつてる　八声　そとちた　白雲のゆふぐれ
　　　　　夜をとほして　やどの庭に　鳴るをまつる
古　ふるみちきゆふけるからころもたつたの山にをりはへてなく　読人不知
〃　まてゝすれはおもひのまそいう殺のゆふけるへたゝれはあやん
六　てぬ人を今やとおもひはる結ゆふ八つる礼あやのくそちるか
新六　深山のおくに生ふる一しきりあちそてゆふけるハ文殊てけり　信実

○鳥
むらとり　うらとり
ゆふとり　夕とり　あさとり
やとかえり　つなとり　ともとり　月夜とり
やすめとり　よなとり　こゑやまとり

すゞめらハ　苗をそだつる農人　ねぐら　ねぐらゆく

松　林　むれゐる

百七　暁と思ひしハたそがれ此山の木末の人はいでゝ声つけて　与清

〃十二　鈴かけはにぎはれ鳴そわせてゝ鈴けのそよぎれ　〃

六　夜の夜の子もちからハのはかゞかゝ鳴てあまた　かへる

○雀　すゞめ

稲すゞめ　むらすゞめ　雀のひなこ　すゞめ　雀の子

葎植ひろい　ねぐらきめく　ねぐらあらそふ　竹をねぐら

朝すゞめ

○鳩　はと

家鳩　山鳩　ともなき友　鳩ふく　秋の人の鳩のまねしてふくるこゑ

鳩鳴そハ　麦まき　友よぶ　あかつき　木すゑ山

六　あきは秋の日ハ山鳩の鳴こそやされ天の川のえんに　後人

三十六　ぎらゝ山路のさゞゆく人に乱れ鳩の杖もかく　栗めぐ飛ぶ　家云

〃　去らぬ木すゑ山の夕くれ秋の声をききにそ鳩ハなきけり　信天

○鷺　さぎ

白鷺　みぞ鷺　養毛　みの毛　あをさぎ

入江の松に鷺　汐みちてゐる　たてりまふ　ゐつけてわたる

鷺のひなつる　大鷺　小鷺　むれゐる鷺　みさごの鷺

芦の根　浦づたひ　汐さし　柳　池のみぎは

森　松　木すゑ　川辺

六　白鷺やゆきの杖の鷺すらもひかりハねぐらとすゞむ鶴を　貞人

〃　夕鷺ゐよその汝殿に川鷺の立てもみてそも鳴ぬ日それ　まよ

六十五　田の面から山本沢にくれ鷺のそよしまれてたさよそこそ収ふ　北

凡 ゆりもの田み面ある立鴫のゆくかくされハかつみ一むら　修竹
〃 すこたくれかものはわるの糸風よみの毛されて鴛そゝめり　蕪法
○鵲 かさゝぎ
良 かさゝぎの峯飛こえて鳴ゆけハ夏の夜わたる月そかくるゝ　よみ人
○山鳥 鸐　やまどり
とほ山鳥　ほろゝと鳴　まそのかゝみ
志らふ尾　まそのさつ尾　まそ尾ハ雄まそ尾ハ長き尾也
妻恋ふ　一峯こえ
六 夕されハ夫まつ丹山鳥のちるくめをさけるもきこえん　後人
〃 枯尾の雪さよることに山鳥のひらりしめれハか結そうれしき 〃
〃 ゝのかを山鳥のおそれやすむとさけハか忠治くさめ　人名
○百舌鳥 鵙　もず
鴫のをくさ　まれのさゝへ　鴫の尾ふす　尾公のまゝ鳴

はぎの立枝　古木の荻　鴫の羽かき　みつ浜
万十 背されハ鴫のはねかきみたれともあさくさ尾ハかわる人よ
新古 風わたる尾花か末に鳴鴫て秋のけしきとみゆるゆふくれ　名家
○鷲 わし
ゆふの依萱草　みやまのわし　えんぬまし　とやをのわし
ふしの山 仏の五百塵　木ならのおく
万十六 志ふたにのふもとの峯にわしそ子うむてふけしきかも　後人
〃十四 つくは根にかゝ鳴わしのねをのみや鳴わたりなんあふとはなしに 〃
○容鳥 かほとり
一種のそらハあらてかふよきうつゝしまなくへとに
万十 かほ鳥のまなくしは鳴春の野のしけきしたひてやまぬくれ鳴　後人

〃 月影のもれくる窓の秋の夜のけはひ聞ゆる 〃
六 夕されは平野に鳴てふかき夜の風にまきれてなくなりし 〃
○山雀　やまがら
巻十 山からの木の実をくはへてつれなくてたつや高きそはの 光俊
○馬　うま　こま
あしけの駒　栗駒　赤駒　毛引毛の駒　はなれ駒
牧のはなれ駒　きのへの駒 きさ之　夕かけの駒　月毛の駒
荒かる駒　大けなる　のさくら　駒ちかくて ちる之
きほひける　ふくる よるの駒　小川のま 秋のさかりて 者のまき之　涙なかしの駒
ひくらし駒　駒のひつめ　駒のほし　駒のあさき
あさての駒　駒のつまはく　人のこま　はなれの駒
駒こゆる とも　ゆふ駒 なつ髪　ふりわけ駒　手つな
駒さくら　牛ひく
風ふけは　麦をはむ　友よふ　つなく　山つれ
あかれの　まくさ　あゆき　河髪　むちうつ
とまりて　いさよ
名所 木幡里 歌 水江君 之嶋浦 群 瀬田長橋 吉 逢坂
五三 志賀の山あはさえゆく人あやの空によりはなれて遠きあらしも 季村
〃七 音にのみきく山のみゆき妹か人はやくもいさえんあしのくろ駒 よみ人しらず
拾 難波えの芦のふるえの下に引はゆのまかひの駒をやすらん 重之
六 久かたの月毛の駒をおさやめきあへん人とのまて天をあふぎつれ 後人しらず
〃 小笠原みつ牧にとる駒もとれはそなつくこうの袖はし 〃
長拾 君か代は雪の消しあさたの藤の駒たまにあまさるらん 為家
○牛　うし

むらしのひの　ことひ牛　大之　うしのこ　つくしめくし
牛のあゆみ　おそうし　おそ斎り　うしの車
田のかせ川　それうし　異縄され　擲の車ほれつ
乃ちやむ　牧のうし　ゑ夢にかくそもすくよわり
良　我のつらそそうしや浦みけん子牛にかくる寄の糸をさ　宗讃
六　吉川のやらとてことひの牛あれハたかしろ牛六頭れ　よしとも
あさ　ゆまみよまま流のそうしみくるそせにくはかまれ秋もさくらのや　宗長
〃　流行つけ都に来るほくし牛子にはつきてやほうてるへは　利家
〃　栫葉かく人の田の畔ひく牛のとところみちも稲さ時代ちはう　光俊

○犬　いぬ

家の犬　佐野の犬　やよのる犬　かくれかるいぬ　つなぎ犬
さとの犬　とくむる　めしきし　ほそひまる犬
犬のかう

○猿　さる　ましら

友さる　むかしはちる　山さる　よめるほる
こあかれく　子をとみらふ　木の実寿る　こさけひ
木伝ふ　月の影とる　月影に影をうる　若むき蔦にすかく
古　わびしらにましらな鳴きそあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ　みつね
六　夕されハ三夜二こひ鳴あさき袖にさくほ人はやせるちらん　〃
〃　宮川の山のさえすまにまるちくもおさるますけおもひゆう　信実
張る　夕付日さしや嵐の山本に袖をひらまさるけく荒れ　仲実
〃　谷さもそれなへの枝かきてそよくとふみ出てましら鳴く　家隆
〃　こゑひてふさんかハよそ人に袖只ひまさるねをなく　写

○狐　きつね　おさね

むきつゞみ　右きつゞみ　さゝれみれく　人まねす
新古 人もこそあれわりなしむきつゞみいくもまつらひぬとて　後京
○猪　ゐ　ふすゐ
猪ふせる　いかゐる　かるもかく猪の床　おそひふせる
やすくふせる　こやをかりける　ふせゐへくもなき
○熊　くま
あらくま　後あらくま　古木のくらや　月の輪
わのくま　苦のあらみの石熊　わくら山　光のもちまし
至 あら熊のすむといふ山のしはせ山せめてもなるあはつし　よみ人しらず
新古 わく山に後あら熊の月のわすれあかぬくれかけなら光　家隆
〃 人ちれぬすみかあつく石熊はかるかやのさわしきを良く　為家
○虎　とら
から国のさく　とらふち　とらのまむ　虎のをもふむ
ふしとら　おそろし　あらくし　手とひのとら
新 あつまをはいくもたるから国のとらのふすのへにきてもなけれ　俊成
云 から国のとらふす野へにふしよるもはやきものにてあきの〃
〃 陸奥のまの藤原ははきはててひのとるれとかる　〃
○猫　ねこ
からねこ　ねこ　てらひのとら　のらねこ　なつけてまし
○鼠　ねずみ
てらつき　ねつみ　日のねつみ　舟の鼠　人の世のみかれく日々まくてらりさくならも
○兎　う
うのもり　うさき　月のまへのめうはま　あやく月はうさあはせぬ
○象　きさ

きはの身 牛のあゆみをまふ きちかふ 何よりさかりよあり

○鼯 むささひ

梢にすむ鼯 吹落る鼯の声 山のさつ男きまに何よ 猛く安

星よ落する

万六 あすまる老さる国山をせめられ八田よ打つる鼯そ見 赤人

〃三 むささひハ木ぬれ求むとあしひきの山のさつ男にあひにけるかも 志貴皇子

新六 みく山の早木の末に住むささひのあやしくまにけく秋の夕ぐれ 家良

○龍 たつ

雲はれき 日影よ出る 雲あるゝれ往 たつのまつ

かくれても八坂の浦 雲ふまるゝ

○亀 かめ

川かめ 国のかめ 池にすむ 蓬莱 みをつの亀 浦島のかめ

かくるの亀 得本のかめ 蓬もかめ かめのうらひ

亀のよはひ 亀の尾 亀の甲 丈あふる

名所 大ゐ川 亀山 龍田川 若井 亀の池

六 流れくる大ゐ川かるゝ八万代とわけふてるの名くなるけるかつくり 順

〃 大ゐ川みせきるかはまるかめ山の蔭のまきるにひとつ 家郁

〃 古川の底のてひろよつくも亀のうへと見せてかれ 後人

新六 川くの亀の田本の夕やをつ何をしらむけハ亀を鳴るまる 為家

〃 川の浦よせきる亀のさへくるそみつよ打るの羽なき 光俊

○貝 かひ

小貝 塚貝 桜貝 あけひの貝 行ふ

かくし貝 袖貝 うつせ貝 みか貝

長貝 伊勢浦 貝の玉 真珠 色貝 拾ふかひ

あそひ玉　ちまつり　貝あはせ　ゐらひ
ちくはの貝　あこやしの貝　時の貝　牛の貝ヾ　むつかし
志てみける　うつせ貝　ゑらひ
名所　住の江　松は　さはの浦ヾ　なのふらで　伊勢の海　二見の浦ヾ
志らの浦ヾ　難波がた　和歌の浦ら　須磨　明石の浦ヾ
及　草葉の上ハうれるよふくふ系物あまひ浜くとりやすれ　よしを(?)
六　よのなかれあもよせるん来てうる人あすれ貝あそてひろもん　母之
○蛭　ひる
拾　世の中よ河中の大原川のひるふそくはうける　西貴(?)
○我柄　われから　秋くさ
あるみる　もに住まし　すをくゝく　うきしつゝ
虫の名の我から　ねをてそなるん
古　あまのかるもに住虫の我からとねをこそなかめよをハうらみし　直子
拾　夫を知らみつられあまのかるもに住虫の名をきゝつゝ　兼明大臣(?)
新古　伊勢まししられずとこそ思ふらめ世をハ恨みし　元俊
○蠶　かひこ　くハこ
ひきまゆ　まゆこもり　新桑まゆ　山まゆ
秋のこ　いとせき　これらかひ　秋のあつり
万十二　たらちねの親のかふこのまゆこもりいぶせくもあるか妹にあはずして　よみ人しらず
○蜻蛉　かけろふ　秋つむし
秋のかけろふ　あきつ羽　あつやるしや　これかゆるぬら
夕ぐれに宿るかけろふ　かけろふのやさる　かけろふの夕へ
六　つき\/の思ふよするかけろふのみまかるよそ人ハ忘しき　従人(?)
あるとみて手にもとられぬかけろふのにはとられぬ身とうかく

続六 何とれ入山おろしふく夕ぐれになさく数かきる軒のけちふ　光俊

○蜘蛛　くも　ささかに

くものすまひ　くもの子すきを　くものい糸　軒のまかくる

ささかに　かきくもれ　いとれにすくる　すかける

衣まとふる　ささかにの糸　くものゐ　くもゐぬくさ

古 くてしはかせる物をささかにの衣にかけてわかれを見る　寛慶

〃 秋の日におく白露八重やつらぬきにかくる蛛のいとみえち　為長

拾遺 はつる糸をみなかけまきよりのまるくつくるすかを見への　政仲

〃 ささかにの芸の技にかかるせいとなのみて別てかくるひもなし　くし能

〃 桔梗結ぶ軒のあやめを絞まてくもへしひく力ものにこそ法ち　兼昌

○蟻　あり　あかりけくおほくあり

続六 こかれ日や以ての玉のかれの上にたいのの虫ひらけらふく　信実

○蝸　かたつふり

家をもたぬ　角のかかへる　はつかの角の

○蓑虫　みのむし

木のまにすまする　木のかくれに　秋風の枝にまかる

○魚　いを　うを

うろくは　いろくつ　魚の子　うく魚

ひかつる魚　いけすの魚　つり舟　釣の糸　あみ　さく

六 伊勢の海に釣する海人の魚まちかけにひかれぬ恋も　後人

新六 塩かれの浦まつるふ魚まてとよ条むへくもなき世へなら　光俊

〃 夏川や瀬くるえの水に住魚の世をかくるをを知る時もし　為家

○鯉　こひ

つれき鯉　流鯉　波のかけ　はてひきする

またかくれなき　河水の下　雲によせてもあら　よし人

六　河水のなかるゝひのくるゝまては何のみのひめきつゝむらかけ　よし人

〃　淀川の底にすむ魚のさゝなみへ八十へてはさへねくれさるれ　家長

新六　よし川にはそてつれるさひさしに鮒も此世はあられいつまて

○　鮒　ふな

鯽同ふなを　すれとこそあ　くはせるみそろ下にふしつけは柴を水に入おくなり

藻ふしつかふな　もふしつかといへる未之

四　沖へゆき辺にゆきいまや妹かため我すなとれるもふしつか鮒　高安王

六　人しれぬおもひはかれへしあふれにとは物ひしけなき　よし人

新六　志賀の浦にすみくる鮒をさそひ沖にまさて鮒さへそあれ　光俊

○　鮎　あゆ

わかあゆ　白ゆふもさゆる　鮎さしる　桂あゆ　ことゝり

鮎さくむ時　落くる鮎　世その落鮎　ほしかれ鮎　同日かれたれて

名所　かつら川　桂川　大井川　玉嶋川　よしの川　吉野の瀧本

五五　松浦なる玉嶋川に鮎つるとたゝせる子らか家ちしらすも　旅人

〃　とほつ人まつらの川にわかゆつる妹かたもとを我こそまかめ

六　あまの世八十鮎もおもひにれ玉川の影すゝ鮎のやれもたらつく　よし人

〃　河ちよの老鮎もねさてゆるへる鮎とるくとる小なの上にて

新六　山河の家ゐの家居のかつら淵にわかあゆつるとけふくらしつは　家良

○　鱸　すゝき

万三　あらたへの藤江の浦にすゝき釣る白水郎とか見らん旅ゆく我を　人麿

六　ゆきかへる人の見しのとて鱸つるとまりて家つゝまみん　読人不知

新六　夕なきのみちくるかたにかゝりてすゝき釣舟　光俊

○　鯛　たひ

桜さひ　網つる小舟　網引あま　何のあ 兼名

六 あまをとこのこきゆく路によひく網のさひえ行八人か志らなん　従八
〃 ゆき着のさくらひの浦の桜さひあぬるみまけやひくらむ　〃

新六 春の海の浦によるてふ桜さひはらきや松のふよみかつれ　光俊

○蟹　かに

あしつれ　芦つるのつれ　桜さかる　あれ

○日調　御調　ひつき　みつき

千世のひつき　とつきね　絶ぬを行く　七のとのきつきね

はこふよかろ　民のつかの御調ね

桜 年毎にきかふのふよ納きし八千世のひつきのをしめ給り　光猶

〃 とくて帰る時にもはにれ王のなる松の浪のあまみね網そ　うき 基

金 みつき納をよゐや帰るをさかる斗みの八千の里人数そひ給り　家経

新 をはまわ民のつかの流網ねてさひきくもいのちくけり　立乱

○薬　くすり

いく薬　やまにとる薬　老れぬくすり　老せぬ薬

くすりはむ　くすりくら　法のくすり　薬のあやめ

よもきうぬ　薬山藤

万 わかさかりいくさりぬ雲にとふ薬もむつ又をちめやも

桜 薬ひよく薬のこそけ奥八とくもいろ方もみるきわれの郎　成秀

○酒　さけ　き　くし 酒の古名 るそ

こやきき 土器 きひの酒　あちろ酒　まつさき くろき

くちし 仏名 坐臥 ひし　米　牛のきふ　一夜酒

まつゆき酒　梅の酒 こりそて　菊の酒 九月九日　えんくすそ

のむ　一つき　くむ

但し 酒をさくむ 八むさし のおひそそ 此酒のきの ひとつてささらし

万三 しるしなき物をおもはすハ一つきのにこれる酒をのむへかるらし 旅人
〃 いにしへの七のかしこき人ともゝほりするものハ酒にしあるらし 〃
〃 夜ひかる玉といふとも酒のみてこゝろをやるにあにしかめやも 〃
〃 なかなかに人とあらすハ酒壺になりにてしかも酒にしみなん 〃
〃 十九 天地とひさしきまてに万代につかへまつらん黒酒白酒を 智努真人

○宴 うたけ

万二十 としつきハあらたあらたにあひみれとあか思ふ君ハあきたらぬかも 大伴村上
〃 にほとりのおき長川ハ絶ぬとも君にかたらんこと尽めやも 馬国人
〃 天地をてらす日月のきはみなくあるへきものを何かおもはん 大炊王

○盃 さかつき

拾 君かためのくちもならぬ酒つきにかけもそひてみぬと見へハ よしのふ
後拾 かちはらの世をめくらん盃のきハのひかりハ月もみなみえ 為仲

○文書 ふみ

とりのあと　せうそこ　ことのは　かきつくる
たまつさ　まつかく　うちのふみ　かしこまりのふみ
むかしのあと　とる　まれふみ　ひらく　たちふみ　むすふ

古 わすられん時しのへとそ浜千鳥ゆくへもしらぬあとをとゝむる 読人しらず
後 はかなくてとゝめしあとの風をしのふるその玉章をかきつめてける 兼輔
六 かひなしと思ひすてにし文なれと猶そのよのかたみとそみる よみ人しらず

○書

古 秋風に初かりかねそきこゆなるたか玉つさをかけてきつらん 友則
拾 かきなかすことのは八千世の末まてもあとゝゝまるてへ 天暦御製
後拾 一すちもちりのこらさるあとをみてあつまれハ人もかれもあつハおもひて 東宮大夫

○本

反　天子あはれみ給ふの子孫を八ひ　其の清代のあいなる人なそ　ちぢしれ

・字ハおそてそこハ法ハ弘法の花も具くかけて有るところ　それ上略

○画

うつし絵　筆のすさひ　墨かき　すみ絵　ゑかき　かき　筆下絵之

絵ハ慰とハ六ッの道あるよしにより蕪村より

○硯

石すゝり　すゝり　すゝりの海　にほふ墨　硯の水

硯のこのちり　筆の海

○筆

筆のあと　ふて　ふでのさき　筆のすさひ　えかき筆

筆のつゝ　眉かく筆　ふとくれ

○墨

すゝ

松のけふり　する墨　うす墨　墨なれ

○紙

みちのく紙　かみ　みちのくの　まゆミの紙　ふところ紙　かみ衣紙

○琴　和琴　○箏

やまと琴 六のいと　あつまこと 和琴之清まくらく　ことぢ

こと

玉の緒　糸のしたひ　中の緒 二十三の　末の緒そての緒

あとちかふる　つまおと　かれ琴　柄舟のこと

うひこと　ゆ緒し　…　松風まよふ

あそふ　あそひ　あそふ　ひく

万五 ことゝはぬ木にはありともうるはしききみかたなれのことにしあるへし　大伴卿

〃七 ことゝれハなけきさきたつけたしくもことのしたひにつまやこもれる　よみ人しらす

古 わひ人のすむへきやとゝみるなへになけきくはゝることのねそする　宗貞

後 あしひきの山下水ハゆきかよひことのねにさへなかるへらなり　つらゆき

六 ことのねをきゝしる人のあるなれハ今そたち出て緒をもすくへき　清人[illegible]

〃 ゆきそてのまちかたらしき大和琴ねにさへやかつきゝ人のきゝくらく二　〃

〃 いつもの琴の音にきゝしかハ人しれすとハみしそほりけり　伊勢

〃 なつきよの秋のしらへにひく琴ハ音をたてゝも夫をとゝめせよとぞ思ふ　貫之

○琵琶　ひは

よつの緒　あるはの月　つるひき　村さめ

○管絃　いとたけ

後 琴のねにおもひのまゝの千とせあれハ人のおもひよかのまんけふも　みつね

手 笛竹のよふかきあそひに峯の松風かよふらん　許伝

○笛　ふえ

笛竹　うら竹　青竹 笛の名之　こまふえ

笛の名 漢竹之　横笛　てらくは笛 胡竹の名之　まてうち笛

牧の奴か吹笛　馬かひの手すさひ笛　儀の笛 晋の向秀か嵆康か旧宅を過て隣の笛をきゝて旧友をおもひしなり

はくはたの笛 八尺　のこゝろさき蘆の笛　枕風に吹合れ　うき一ふしの折

あきはてゝおもふる　落る梅 落梅花と云曲名　月にきこゆる　笛竹ひとよ

[illegible]　さかのさるのこゑ清か 楽の名之

六 かゝ竹ねくらくのまきにかよふせられ人のあはれをまなひしおもひそくく　よみ人しらす

〃 八へかさねふるかゝりし笛竹のよこゑやなとゝかく人も [illegible]　〃

〃 笛竹のふしのまもこそハかなしけれすてゝよのよもかうるれそ　〃

良材 笛の音の音おりかくやゆるハ心ちろうるとうけハ生あらん
〃 いつまでてちく来へし営れさへつまをあらしかくの笛竹　正枝
新古 明るはる浜の笛の声こゆるやうしきさへ千歳けらうらん　知家

○鼓

その世うし太鼓とけふ雨路てみちら　はくみ
時のつゝみ　大つみ　うちおもれ　かくしはみ
つみ音むけ　濁世のさまおり

○鐘

うるのみち　かねのおと　時つくる　ねまきのかね　夜の鐘
霜夜のかね　雲のかね　かねのおとさゆる　霜夜れハ　庵のかね　文ゆくかね
夕くれのかね　入相のかね　暁のかね　明ゆくかね　嵐の夜
みさきのかね　古寺のかね　枕よりくく　歳おもてらん

うつ　つくる　ひく　はく
つくゆ　ゆゆる　あゆる　つきそめ

名所 初瀬山寺　あらしの山　小くら山　ひえの山　撞鐘寺
三井寺の鐘に撞ん　難波寺　捨身　荒寺寺　寺々も　よしなし

拾 宮ある人のかねのおとてけるぬと山寺の杣しれ　よしなし
良材 はれく一もねられぬものをはくしくつき鐘ハかねのまるれ　和泉式部
千 暁のあかしたくすかねのまきもんのそこてよちらへてそおく　四信
新古 暁とはるのまつるときにやかましかれとまるかねのまきられ　俊恵
新 いつもそのかねをあるれかをおそかる浮世のなかめさしる枕よ　兼経
〃 初瀬山あかしのかねのひ浪われハいてかへりてねるかねの打ちられ　為伸

○蹴鞠

まりみる　まつ　まつてゆ　まりはてひ　日本のかた
まりあそ

まつのおと　あらしまじる　まつの風　こがらしふく木のおと
松みどり　まつ緑　かへるれは　あさくさるとき
○碁　て
こゝれ碁　碁のまさて　碁のまち知ぬ　こゝれにし
けちされ　かちまけ　山人の斧の柄くちし　王質仙人の故事
○弓　ゆみ
まゆみ　荒木の　槻ゆみ　梓弓　梓のまゆみ　手束弓
しらまゆみ　あまのこ弓　はまのそゆみ　ゆつる　弓弦
かちゆみ　小弓　とらゆみ　槻の弓
ひき　まれなる　おしてし　ひきて
ひくて　いる　まれつ　もの　つまきんつれ
えみる　ゆみふくろ　ゆつる　ちぎり　ゆつの　かく

あつさゆみ　ひく　志かのかへる　はつきのまち　あつまのまさら
万七　みちのくのはつちのまゆみつらはけてひきみるよはんあとあるなん　後人
千十一　梓弓ゆつきかへあてをてはひくとも言はれし
古　まもかくれ月日へはけるあさちね　よるへはむかしを
後　まもはの人のうらにいるを神のまへはるかて　よき人
六　陸奥のはるちのまきをかれもんとははるやまの
金　梓弓はるこふはそのるなくそめはいをかへる聲しやは　附房
○箙　矢日　や
天のそくや　まるや　とも矢　矢二筋　やはさき
矢おと　矢すら　そらぬ　矢　矢羽　はそつき　矢のはの
まれつ矢　箙をとる　はやらし　流れ矢　ふるう矢　やなり
志の矢　矢梓のしの　を矢はへく　すくれる　はて矢　ひく

矢たばみ　わらふ　すけらき　むれき

[illegible]

○太刀　○剱　○刀

たちかち　玉つくり　つるぎたち　ほそたち

やきたち　小たれ　古かたれ　さしかたな

おしかれ　もろは　杖のかれ　剱之

めぬきのたち　おくたち

ミ　はる　さや　ひとかたれ

[illegible]

六 [illegible]

○斧　をの

つまのをの　ほさきる斧　斧の柄くちし人

をのゝひゞき　ちけきてる　こりはて

○玉　たま

よるひかる玉　みかける玉　かざしの玉

七やさの玉　あそび玉 玄珠　衣のうら玉

玉の緒 [illegible]

初瀬女の [illegible]　玉のすゞ　玉しく

玉ひろふ　ぬき玉　玉のうら　くしげ玉

浪の玉　あら玉　玉手箱　玉ゆら

まろかる玉　玉緒　玉くしけ　あまてらす玉さくはなと　まろものなれし

万九　いもかため我玉ひろふ沖へなる玉よせもちこ沖つしらなみ　読人しらす

〃六　つれ〳〵とせんかきぬるみなかよふ玉たにもなきはやましし　千年

〃十八　白玉をつゝみてやらはあやめ草花橘にあへてもぬくかね　家持

○金　こかね

くかねのこゝろ　あかね花さく　こかねある　なれる宝

万十八　すめろきの御代さかえんとあつまなるみちのく山にこかね花さく　家持

○鏡　かゝみ

ますかゝみ　まそ鏡　ますみのかゝみ　影かゝみ　丸かゝみ

ひらかゝみ　古かゝみ　やさしき　飛鳥　谷のかゝみ

みかゝみ　友かゝみ　月のかゝみ　池のかゝみ

身をうつれ　よもあるかたえ　うとし　うつる　くもる

もとよ　手にとる　影やなれ　あつけけるかゝみ

てらし　かくる　みかく　姿見

は　身をわくる年のくれはまれとみ鏡そこそはなくつる　きよし

拾　千年まてもゆふへのかゝみにうつる人をみるはかなき　いせ

六　影られ八重にいくとみる花のさかりそらなぬものか　読人しらす

○櫛　くし

をくし　玉のをくし　つけのをくし　つけ櫛　はらくし　髪くし

われの櫛　斎宮のいせへ下りの時天子の頭の上に櫛をさしてかへり給ふ　櫛箱のをくし　けつる

さし

至　影つくもかみくしふくあれと何の見をとはれぬ　よみ人しらす

後　難波をなかもたつぬまとつくしふかきのうはけつらて　玉関女

六　芦の屋のなたの塩やきいとまなみつけのをくしもさゝすきにけり　読人しらす

○櫛笥　くしけ

玉くしけ　あくる　ふた　み　あけくしけ

六　三川のえのくるみてもおの人ハ箱のふたのくしけハ明てゆけほ　伊勢

〃　夜をよしみのひろきもハ箱れふたのくしけもをしまれつゝ

○髪　かみ

黒髪○かミ　髪かたち　ねくたれ髪 ねくたれ髪　くろ髪　白かみ　ひとひかみ

ふりわけ髪をきれ子の　うちみたれかみ　みたれ髪 けつりさし　おちくみ

みるふさ 油なとさして云　おもろのかく　ましら　うきせ

けつる　結なれ　すち　こされ　みくる

よもきのかみ

百五　黒髪○かミやまもハかくかきくゝれ人の手ふれてかみ　よみ人しらす

〃　黒かみの白くなりゆく身にしあれハまつ物まてを何そかれそる　こうる

○鬘　かつら

玉かつら　ふのかつらも　梅のかつら　葵かつら　かもかつら

かつら〳〵　ひかけのかつら 菖蒲　やなき植のかつら　田なかくかつらあをまさく

百八　かさのかつらやなきを植く梅の枝の雨の柳植のかつらみをさらぬかも　家持

〃十　るはるをのかつれるまきてつゝくる者かねのかつらをまとき　よみ人しらす

○挿頭　かさし

かさしの玉　玉かさし　かさしの花　千とせのかさし

花のかさし　きく挿ゝをさかめけのかくれても　やさつゝかさし　油井のかさしにてかへ貯なとかいふ

おもひかさし　日暮するまて　かさしさる　何くてもかさしに折る　うれしよかさして

百七　いにしへにありけん人も我ことく三輪のひ原にかさし折けん　人麿

〃九　長月のかさしみむのつまくらひとみるなけし此川のせそ　同人 家持

〃下　百しきの大宮人ハいとまあれや梅をかさしてこゝにつとへる　よみ人しらす

六 やさしさの房よきてはちかりゑてあまハきてまちのけり ゞ

○笠　かさ

みかさ　あみひかさ　きぬかさ　菅かさ　菅の小笠

かくれかさ　袖かさ（ちて袖笠 あふそてきかさね）　松かさ（住よしのきしの）

梅の花笠（鶯の花笠 てふかさ）　笠やどり（袖の笠よる中山のしかさ）　やぶれ笠　斗笠

市女かさ　白菅の小笠　三しまの笠　鵜飼かさ

志ろき笠　かさかさ　笠とり山ぞ

万十 なしてるや難波菅かさおきかへし ほくるたん笠なくられくれ　よみ人しらず

古 みさふらひ御かさと申せ宮城野の木の下露ハあめにまされり ゞ

六 菅まてハきても見えくへく旅衣あらしをめはなるらぬみなれかさ　新古

○簑　みの

やさしの　かくれみの　山菅のみの　さゝめみの

濡かるゝの毛　みつ衣（ころもとの かひなきかい）　四条長の鳴　勝

万十一 久方の雨の降る日をわが門に簑笠きずて来る人や誰　よみ人しらず

○杖　つゑ

ちとせの杖　竹の杖　杖よきる　玉をさぐ

杖つくよひ　杖よりて まくらちきのいさめし 杖（杖にて 扶持して）

よとせの坂　きびの坂　かかひてあて　つき杖

古 千早振神のきりけんつくからによちとせの坂も越ぬべらなり　遍昭

拾 ゆりよ千世をこめる杖なれはつくともよ尽せしひ　よみ人

ゞ 君が代坂をけふ越されハ山人の千年ためしてきる杖なり　読人しらず

六 よくともへてかつる竹杖つきて心のあたるをみるすもの、

○沓　くつ

木沓のくつ　あさくつ　なにさく川

ぬく沓のかさなる　人のあつまるをいふ又女の
もとに男あまたまさるをいふ

○褁　つゝみ

山つと　家つと　浜つと　都のつと

花ゆきさつと　ふりてひろふを
わすれじといふ

万三　いせの海おきつ白浪花にもかつゝみて妹か家つとにせん　あき王

〃七　あしひきの山行しかは山人のわれにえしめし山つとそこれ　元正天皇

〃八　をみなへし秋萩をれれ玉ほこの道ゆきつとゝこはん子かため　石川老夫

○筌　簀　さゝみ　かたま

水鏡をいふすなはち八間の羽くゝのする河

ゑたるん　流るゝみかつをつゝ入る鏡

よみ人

古　ふかきにあれたる人のはるかにおれつれぬるん　よみ人しらず

万十二　稚菜つむはよをたつかふかき浦のわたるもかけやらん　あき王

○筵　席　むしろ

さのむしろ　月のむしろ　月のなかの手にとるをいふ　あやむしろ

花むしろ　狭むしろ　ひとつまたはいふ　かやむしろ　苔むしろ

菅むしろ　芋むしろ　たかむしろ　竹むしろとて夜のしきものなり

いなむしろ　いさめる　ひとへ　しく

蘆をはらふ　菅つかる　たくへし　とりぬまる

万七　みすゝきのちる海の菅むしろうれつかみけんさしてぬまつれよ　よみ人しらず

〃十一　ねぬる床にちるあやもあやむしろともなるかきつかん

〃　しきたへのかわらむしろも見えもしらんよしもなれ

○床　とこ

古　かつらしくなしつ床をとて又はつるはしてもあかつきまてぬ　伊勢

六 かきくもる床のみさびしき夜はにはのしげみにたへる虫ちてそ泣き　孝胤

〃 そらの床あらはなるきはあつぬ露霜のきえしもかるそらの月　つるゆき

○菫

すみれ　すみれ　きすみれ

つぼすみれのきれ　すみれ草　さかと見ゆ保人

いよすみれ　しのすみれ　きれのかけき　芦すみれ

　　　　　　　　　　　　伏やのすみれ　糸のすま

万四 夏の野の川ほとりにすみれつむ人ものうちくらし秋風のふく　為家

〃十 すみれのさくいのすそには草ねてもえいかよふそ　よみ人しらす

拾六 へたたれと来るはるの野のすみれ君ならぬ人も見えそゆく　貫之

○樋　ひ

竹のかけひ　下ひ　ちらひ　筧　山田の筧

かけひのくちあ　されひ

○火取　ひとり

このしたひとり　このしたけふり　うへもる　ふれふる

床　ねきすのあさえ　つはめこえ　ことりの

六 たまのとこかけてなそ見るのはるさめていなとしきん　俊恵

〃 我なみハねもやらてかのもと霜しをきにたまとまよひけれ

○枕　まくら

草の枕　たまくら　新まくら　袖まくら

小夜枕　初草の枕　玉もの枕　てもまくら

笹まくら　あやめの枕　菅枕　かや枕

岩枕　旅まくら　忍ふの枕　松かね枕

旅枕　うき枕　木まくら　浪まくら

うちまくら　枕の塵　枕ゆふ　枕まく

枕ならす　枕さためる　枕の下　枕の山

ひぢまき枕　枕とる　まくらかる　枕のちり
夏のまくら
万三 うるはしき人のまきてししきたへのわか手枕をまく人あらめや 旅人
〃十一 妹をこひいねられぬ後朝の枕とならてそて乾めやも 〃
〃 むすひひもとかん日とほみしきたへのわか手枕は苔おひにけり 〃
六 みちのくのくらまは山のかやの木のまくらにあれと夫の手枕 〃
○衣。絹　ころも　きぬ
ぬきぬきさきぬといへとも衣とてころもとかきをしてきぬといふ
みそし 貴人の衣裳也　紫の衣 四位以上　あけ衣 五位　みとりの衣 六位
小忌衣 きよみの衣とも神事に用　山あゐすり衣 同　山藍にすれる衣 同
うら衣　清衣　狩衣　和らか衣
法衣 袈裟之　麻のさ衣　ふところも　ふた色衣

初はなの衣　紫のねすりの衣　一しほ衣 紅そめも多の色之　いろそめ衣
やしほ衣 色のよききん　ひとすら衣　思ひの衣　志のふの摺衣
なれ衣きぬう衣　玉石摺衣　山ぶ衣　夢ふ衣
ゆふふ衣　あまころも　塩焼衣 塩やき衣　ほしかけ衣
かりしき衣　はたつもの衣 うすき衣之　蝉の羽衣 同　錦衣 すみれ衣也
若衣 僧衣之　法の衣 同　藤衣　萩か花衣
志つくる衣　霧の衣　皮ころも　毛衣 鶴をいふ
ぬれ衣　旅ころも　古衣　恋衣
杖さら衣　志いすら衣　天の羽衣　まねく衣
袖つけ衣　すり染衣 僧衣之　新桑すりの衣　つくしきぬ
からの衣 狩衣の之　ゆきたへの衣 白きを云　あはきぬ　とをきぬ
ときはのひ衣　つるはみの衣　赤袖 五位の袖之　紅すりの袖

衣々きる　衣のうら　きぬる　ひとへ
いくへ　あふ　あやな　まろね　ひも
きる　春雨　たちし　ぬる　めす　まつ子

万二十 宮人の袖つけ衣秋萩ににほひよろしき高まとの宮　家持
〃七 住のえの遠里をのゝま榛もてすれる衣の盛すきゆく　よみ人しらず
〃十五 夕されば秋風寒し吾妹子かとき洗ひ衣ゆきてはやきん 〃
〃十 ことし行新島守か麻衣かたのまよひはたれかとり見ん 〃
〃十四 風のをとの遠き吾妹かきせし衣たもとのくたりまよひきにけり 〃
古 山吹の花色衣ぬしやたれとへとこたへすくちなしにして　素性
後 春ての野の花の色にそめおきてやちれと見ゆる衣かな　大輔
拾 はなそめの衣はすらん夏草のしけきかくれて深く咲てい　[illegible]

○裳　も

赤も　あかもの裾　赤もすそ　もひきの裾
万十一 立て思ひ居てもそ思ふ紅の赤もすそひきいにし姿を　よみ人しらず
〃十三 いにしへのはかりやすもことくもゝいのあかもすそひけりしむ 〃

○衾　ふすま

錦のふすま　まくらふすま　麻ふすま　麻てこふすま
夜のふすま　はたふすま　さしふすま　きぬふすま　〃の衣とも云 又ふすまのころもとも
新ふすま　夏ふすま　妹とふすま　里のふすま
さむる　いくへ　かさしく

万四 あさふすまなこやか下にふせれとも妹とし寝ねは肌し寒しも　藤原麿
〃十四 にはにたつあさてこふすまこよひたにつまよしこせねあさてこふすま　よみ人しらず

○緒　を

玉のを　なかき緒　つなきを　あさを

うちはへ　きるなれ　すの緒
いきの緒 今人　詞のつれを　うみそと　糸のを
むすふ　とくる　もさ　みゆる
万四 玉の緒をあは緒によりて結へらはありての後もあはさらめやも　紀女郎
古 かたいとをこなたかなたによりかけてあはすはなにをたまの緒にせん　よみ人しらす

○紐　ひも

はれひも　下ひも 下紐　中のひも　ゆふての紐
花のひも　小車の錦の紐　ふむすひたるひも
結ふ　ゆふ　むすほれも　ちきれ　とく
ひものをちか　にしきの紐
六 はちすはの錦の紐をときはなてかさねはねなくしてん一夜のみ　元輔
古 結ひてしつれなき人の下紐のおもひはいさ結ひてん　よみ人しらす

○帯　おひ

玉の帯　衣の帯 官服也　うけ帯
しつの帯 又 帯　菊の帯 きくの紋ある　花田の帯　下の帯
井手の下帯 ある説　人の帯　ひきつゝむ帯 玉つくり帯
めくりあふ　むすふ　とくる　ゆひされ
万十一 いにしへのしつはた帯を結ひたれ誰といふ人も君にはまさし　読人不知
古 下帯の道はかた〳〵わかるとも行めくりてもあはんとそ思ふ　友則
六 東路の道のはてなる常陸帯のかことはかりもあひ見てしかな　読人不知

○絲　いと

うつくしいと　くりいと　菓子のいと　ふた田のいと
夏ひきの糸 ぬきいと　手染のいと　麻より糸　麻のうみ糸
わくての糸　彩の糸 七夕　むしいと　下 木のかのあかき いと

志けいと 日　志つけいと いや　あら糸 [illegible]　片かなの糸

絹のいと　織のいと　むま　みだれ糸

よりいと　くるい　ひく　よる

くり糸　すぢ　あや　まき　みだかき

万七 河内女の手染の糸をくりかへしかたいとにあれどたえんと思へや　読人

さらさらに [illegible]

六

○綿　わた

つくしのわた　真子のまひ綿　一もとわた　やそのわた

万三 しらぬひのつくしの綿は身につけていまだはきねどあたゝかに見ゆ　沙弥満誓

○布　ぬの

きそのあさ布　調布(テヅクリ)　さらし布　[illegible]の布　[illegible]

かち布　[illegible]の　細代の布　[illegible]布　布さらし　[illegible]

万十四 玉川にさらすてづくりさらさらになにぞこの子のこゝだかなしき　読人

六 陸奥の [illegible]

古 [illegible]　伊勢

○錦　にしき

から錦　高麗錦(コマ)　衣の錦　小車のにしき

[illegible]　[illegible]の錦　秋の錦　[illegible]錦

とりの錦　千々のにしき　錦のかく　[illegible]のにしき

古 [illegible]　実性

は [illegible]　読人

○綾　あや

[illegible]あや　[illegible]のあや　おりもの　[illegible]あや

丹六 [illegible]　家[illegible]

ゆきすゝ風ふくしよそにやきまわれあやしやきて世をやつるらむ　為家

〃 面しきや大内山のうしろにはおちへのつれあやしとそまほる　定俊

○車　くるま

をくるま　まくるま　糸毛の車　かさり車 かさり 車

ゐつ人車　人をまひ 供の車 〃 あしろ車　力車 方長引 車く

七車　柴つみ車　柴車　牛をつくるにかるとさろへく

思ひ車　炭の車　空車 五十 人のけちぬ　やつれ車

早車　流車　三の車 秋霜く　車をとらてを

わきひぬく　きしる車　たち　わくら　さるて

かろさ　めぐる　なかえ　下すれ　ひく

牛　車をとくるよそひ七さく　法の車　羊の車

万四 恋ぞよとちく車にゝにまつもそこみくいはいくろかゝ

枯 世中よりし牛車のわかきハ枯ひのゝこをいくく出やし 〃

〃 まき馬にてぬ牛てわ車にいれしゝき世をめくるともすそ とのる

○筏　いかだ

いかくし　松のいかた　杉のいかた　いかたの床

いかた棹　いかた縄つれて　おろれ 下れ　筏士の麻の衣

筏士を下し　手敷さして　瀬のさら　川瀬のかゝる

くゝし　くむ　それ 棹え　なつむ

名所　大井河　戸無瀬川　清滝　丹生の杣

よしの川　初瀬川

宿 朽さて瀬をて後世の流れよりに杖をのそれしにみちけり　法人

○舟　ふね

品つみ　枯野 舟の名　天の川舟 七夕　河の舟　遣唐使の舟

いつてふね　大ふね　出す　ま舟　はしふね てんまをいふ

櫓おし小舟　あまや小舟　流舟 なかる　藻かり舟

芦分小舟　芦分舟　もゝ荊舟　あまの棹ふね

河竹のよ渡舟 赤くぬりたる舟也　すて小舟　友ふね

かゝり舟　渡舟　うへふね　つりふね

一葉ふね　河ころひ小舟　棹ふね　業ふね

舟のうち　釣ふね　佐野舟　いさり舟

高瀬舟　いさり舟　引ふね　しほ舟

つなぐ舟　つなぬ舟　昔の舟　捨小川舟

泊舟 まくらするをいふ　世をわたる舟　舟あらそふ　舟よそふ

みやひ ふねくさ　さきゆく舟　こぎ出す　こよひ

流れゆく　こえ　舟人　舟をさす

舟路　く舟　舟出　舟ひるき せる

舟さし　浦　海　川　江　船玉

万六 またのこと やちつよみ河の山みけてくちよをとらう 業

七 風ふきて江の浦まきて舟の舟人さわく波の川ちく 業人也

、 棹すてゝ舟かきれは舟ありてあふくもかたみ舟

古 江のあかくふれは舟も風そよみのまちへもちける

同 難波はをけまそ入つゝもよへたや所のまゝ渡る舟 業平

、 今さらくさきたる舟の綱ひきそひらりとはなかれぬるそれ 小町

六 追風の吹ぬる時はこく舟の帆もてかへく 業王

〇帆　ほ

上帆　ま帆　帆まけ　帆影

帆まける　帆あけ　ホて　ひらく

○楫　かぢ
うきまくら　かぢまくら　うきまくら　かぢまくら
かぢのおと　こぎかへる　かぢをとる　ひたる
万七 さ夜ふけて堀江こぐなる松浦舟梶のおとたかしみをはやみかも　作者未詳
○櫂　櫓　艣　かい　ろ
かいのしつく　こころ　とも ろ
○碇　いかり
いかりおろし　いかりのつな　いかりのをハ　しづむ
万十一 大舟のたゆたふ海にいかりおろしいかにしてかもわが恋やまむ　読人しらず
六 追風にかせ八ちほつて吹めともあすのかねまちやせん　伊勢
○苫　とま
とまゝよ　とまやかた　ゆくゝ苫　苫かゝる舟　箔

うかみゆるよ　ゆくちのひま　縄やの軒の苫　ちらかつく
○網　あみ
手引のあみ　網引　あみのめ　網の縄　綱のうけ
網をはる　網のあみ　すくなく　たえて
あみとる人　網引人を　おく　うけき
あみする
万三 大宮の内まできこゆあびきすとあごとゝのふるあまのよびこゑ　意吉麿
六 いせのうみの浦にあみさてなみのまにしけき恋をもするかな　読人しらず
○綱　つな
まきもの綱　つなて　とも綱　綱手ひく
綱手縄　舟の綱　碇の綱　帆の綱　あまの綱　綱引

わらその縄　ちひきの縄　牛のはな縄　引手あまた

○縄　なは

栲縄　つな縄　いかり縄　あし縄　特縄　網手縄　綱縄　くゞめ縄　さゝく縄　ひく

くる　たく縄　とくえ　うちはへ　一筋

墨縄

百四　たく縄のなかきこゝろをはたくハらえ人はさみてちらさて　衆議蹊子

廿六　これ尓や旅のゆくきとゝるやとくるくひろく縄くりてあくてみ舟　六家

・露々のかりのおちこく縄ハさすれを此世にかゝまくしゆきま　東巳

○魚梁　やな

やれおちこえのあらやれ貴之　やれうち川。　さゝうかやる　於之

さえれかやれ　日　やれ淵の底　さえ

名所　よしの川　宇治川　田上川　吉野川

百十一　何とんかやれおちて瀬をすきんハみもこえとこゝにあそぬかも　漁人家持

拾　やれこれハ川風はさく船舟を瀬のおさ之ねちまちかきはる　母く

○漁　いさり

いさり火　いさり　いさりく　いさりふね　漁の火あらけ

浪まくらせるいさり火　あさりする海人　何まてのいさり火

百五　山のはる月さへいさり火をさしのほのよりて沖をさすまよ　よしのき

六　大海をはらぬ船かはとほしすくみゆるかくさて火のあけ　母くこ

○釣

つりふね　浦　海川浮き　詞のうけ　つな縄　詞のいと　つりを　釣る

すき釣　海さち　川さち

百三　風さはくとも杉まつの底に落るも海人の釣舟浪にとらへかぬ　角宮

百十五　むこの浦のさはらくひのらいさり火とゆふかの釣舟浪の上はゆに　光秀

〃九 はるさめのひるさめの風のはなたちはつかするこのころしてかへるなんゆく
六 いせのあまはたちはらぬ蜑のきぬなれもうそそ浪に袖ひちぬる 〃

○ 猟 かり 山里にす

狩ぶり 夕がり さつを はつかり
ねらひ 山ぎち まつしかれ せこあつむる
夜のともし あひ もとむ

百五九 手まちてにらみ拾て狩かり人はさらぬ称ての君よ 後人 家隆
〃 露かるむのうらみてあまの目つきのまへてまはれる とらね
〃 足引の山も時やきかり人さ川来らきみなわきたる 赤人

○ 海士 海人 蜑 泉郎 日 あま

海人 あまびと あまをとめ 塩やく 塩くむ みるめかる めかり
あまのたく火 いのつく 蜑のたく縄 釣するあま

あまのもしほや めかりきね 何をまつ 孫兼つる
貝ひろふ あまのひきも 蜑がすむ 蜑のまて 拾ふ
まくろく 拾ふ

万三 志かの蜑はめかり塩やきいとまなみくしげの小櫛とりもみなくに 石川郎女
〃 しほテのうらのはまあれてつりぶね おりさへいさればえん 角兄 六呂
〃 十五 それやこのなにおふなる門のうつしほにたまもかるとふあまをとめども 秋奄
〃 わたのはらおきつしらなみたちくらし海士をとめども嶋かくるみゆ 上人 まきん
〃六 きれきよかちみえる海ぞけつめぐまの蜑のみまくほし 赤人

○ 樵夫 ○ 樵路

樵人 きこる 木こり 薪こる 杣のを
うちつ山人 杣木のまん やすむ樵人
志をもろ ひをつまなれ 杣木をつむ 帰る山人 あくきてかへる

谷のかけ路　ひとつくの渡さ　柴をかけて休む　とる宿のえ
打も越ぬひつま

○傀儡　くゝつ

旅中うき　旅ゆくのとま　一夜かれ　うれてあかく
やとかりてめ　野路の旅ね　これもこの宿　河岸の底の宿く
名所　かゞみ山をみ　野ちの里との　小さる山のの里　忍

○遊女

旅のむ舟にてつゝ八里のあそひされはこそよるなきゆ
うかれめうかれ　ころもまし　うききさ旅ゆ　波のまにまに
一夜つま　ひとよあそ　うきさみ　波まくら
旅をとゞめし　舟をさらひてゝく舟　よるへさだめぬ
よ世てへたる　うかれよれく

○匠　工同　たくみ

至一　かよくに掲へみやいあそ路人のうた書縄のくゝひとするよ　淡人家

旅　宮つくるひたみくみてもをの書れかとくしかるめをさきぬ　国茂

○商客　商人同　あきひと

万七　西のうみにとひかもてめわたれはかへるさきぬの旅まてゆも　よみ人しらず

○隠士

六　流しあるへ人の世くしからけくてるをいとえ

〃　世をそむしとはとひ人へ神さるのとむろ山ふ入よけるかな

〃　そむくとて雲にはのつねおかれきと世のうきてにとよそにはる子　読人家

○僧　浄侶同　のりのし

〃　谷のえいゝさられは又をすけ人ゝうき世中に渡らはまされ

〃　いつておかへとさ世となる谷の松の折にゝ人まちもうゝ

苔の衣　墨染の袖　こけ衣　うへそく　僧侶そ僧行ふる之

古　世をはらひとのりくおもはす立てよるうち僧の袖のきぬ打か　よしみね

〃　かゝらてふみ[illegible]の行末[illegible]ふみなほ[illegible]かゝらん　慈鎮

反　[illegible]ねはかゝれてしぬ[illegible]のうちをみをなそれやまけん　[illegible]

千　[illegible]のすみ僧のころもかなるはくるものかな　覚性

○尼　あま　さけはま

浦のあまよせくる浪よあり

古　[illegible]の[illegible]かはきあまき[illegible]あま[illegible]　よしみね

反　[illegible]松の[illegible]八十み[illegible]　寂蓮

[illegible]　なれみえし花のころもを[illegible]そろもを立てゝ[illegible]つる　[illegible]

[illegible]　一すちに[illegible]ひてやおもひすてもみちよつるらん　[illegible]

○仙人　やまひと

反　[illegible]まてやまか[illegible]れ[illegible]とをとく[illegible]　慈鎮

[illegible]　[illegible]ぬきぬの山里八十[illegible]人さへやかをりおもふ　之[illegible]

○高貴

雲の洞　仙洞　青の[illegible]　[illegible]　杖の[illegible]　皇太后　[illegible]の[illegible]　[illegible]

関の白雪　関白　星の位　大臣　三笠山　大臣大中少将　大宮人

雲の上人

[illegible]もかく[illegible]のかくれかくある[illegible]

○行客

[illegible]中にて[illegible]人を[illegible]旅[illegible]　[illegible]

反　[illegible]すみやかにあまよ[illegible]つむ[illegible]らん　[illegible]

〃　[illegible]のやみてやの[illegible]はつる[illegible]きやせて　[illegible]

○親　父母　おや　ちゝはゝ

はゝそはの母　かそいろは　父母之　はゝそ　木の葉を母によそへてよめり

ちゝのみの父　ちゝ木　母によそへてよめり　おやのおや　祖父母之

母とじ　あめつし　人のおや

万五一　世にふ二ひとえぬちゝ母をおきてやれくいつかわれなん　惟玄

二十　父母にふかれかゝやる枕旅ハゆくともはてゝゆき　是品

〃　まちわびしほけめて作れるとのことはせ母と酒のかせて　首座

良　人の親の心ハやみにあらねとも子を思ふ道にまとひぬる哉　兼輔

○子　こ

万五　ゆうねしてひともうをんな増れる宝子にしかめやも　憶良

〃六　ゆくらぬ木ほく妹と寝ふるさき只ひとり子に生れ来し　帝宗

古　世の中にさらぬ別れのなくもかな千代もとなけく人の子のため　業平

○夫妻　いもとせ　いもせ同

せな　夫之　わか世こ　夫妻かよハしていふ　人妻　他妻之　ますらを　大夫をさしていふ

てゐる妻かくれ妻之　世中の清きかりの妻子

○幼　をさなき子

ミとりご　うまれし子　うれなる子　かきおなご　ハゝけなき

わかなけ　ワラ子　竹の子　小松　二葉　なでし子

○老人　老翁　おい　おゆ　おいらく

おいらく　老の子　老の母　おいぬれ　老の尾

老の波　老をかへ　老の杖　老めるえ

友なきさ　老ぬる　老ぬるみ　みつわくむ

翁さひ　老すさふ　まれのよはひ　七十　かゝみる翁　かしらの雪

家のうち　わが世のなゆく　ゆがみたる杖　わらふ老みみ

家の道　白髪之　おとゆひのたき　老の杖つくを　笑ふかな

古人　むかしの友

万十　折々はあはれきこえし人ハなかなかに見し折よりしたはしかるべき　よしとも

古　白雲の外へ隠しけるかへる山々くしおもひおこす都　柿梁

及　まされハワか思ひ出しぬ白川のみつえにむすびておもはける　柿垣姫

拾　いにしへもかくやありけん吉野山やまよみなるときよそひける人　え帥

六　かくてほの山田の稲をかそへつゝおもひやる人をつれてける　こつ子

〃　世をそむきてやすらふ杖つきて花のあとをもみるよしもなし　後人の家

○遊士

仕へ居る人またハ仕へて出る人またハ旅行の人をさしてよめり

○遠情

遠くちの事く引るを思ひ又ハ遠くはなれし雲の外の山をもおもひやる事を定家卿をしたひて又後の世

をは見へけりくあるおもかけすへてまこと思ひをやるてふ折り

雲の外を　ききや行　千里の外　ききささい

ともるる　かよひし　待まれる　おもひやる

春　月　雪　花　雪月花

千　古への桜も嵐の風にさそはれ雪のあとをおもひてやれ　宗祇

新古　ふるさとの千重の外の花にさそふもかくしと思ふ峰の山　慈円

元禄　はるかなる花の後のけしきまて何と思ひ合て見よ月と秋　小督姫

〃　おもひやる先の外をみまてしへそめやよすかなる月かけ　俊光

後拾　かすみてやまた白雪に遠来の浦のかけし絶やしめる舟　従三位

○眺望

おもひ　山海川いつまでもはるかにえながめきさまにあり

おもひはかへ　かくれなき　もなく　千里の外

雲井にまかふ　ゑをさそきかり　そてにこほえね　みるかなよ
関路まさく　なかめにくる　明も山も　浦のおもま
まき山　むら山　をちかた　霞　霧　舟なかき
舟わけ　山もいくへ　夕なぎ　浦のおふる
海原　ちかみ路　あさしの山　ふかきの里
かへる白浪　いさり火　つらなる　末の川ちどり
ふるの里　急ぐる　沖の小しま　をち方の森

万三　住の江のえなつまをてかへらせハむてのとまかゆ出る舟人　遊人
ゞ二十　難波門をこぎ出てみれハ神さふるにこまころねよそそ梶了　三条
ゞ七　むはしまたもあれいふてつかみすてゆんとあく人のまえ　よみ人しらず
ゞ　わかれ行まに梶こき出ていえしとはの松原に　ゝゆ
ゞ三　もやくの川ゆれせもとやられてまくも我ハなみつるかも　長田王

ゞ　天さかるひなの長路ゆ恋ひくれハあかしの門より大和島見ゆ　人麿
ゞ十三　逢坂をうち出てみれハ近江の海白ゆふ花に浪たちわたる　読人しらず

○旅　○旅宿　○旅行　○羇中

旅といへるハ唐くも旅そして又都もさかりくにへはもちぬるを
とひはいひ旅宿ハ旅の中の旅行ハ路を行く羇ハ旅の
こころにて此等旅ハ其心をもとて引かうつく次まうつり
けたしきへく行て古へおもすへてかそしてよあり

旅ころも（たちの　いそき）　ふしゆくさ　旅の山ぶし衣（山ぶし衣）　旅のそら
草まくら　旅枕（旅枕）　松の枕　笹枕なる
草引むすぶ　草すまひ　衣かたしく（かたしく　そて）　都いづる
都の空　山をこゆる　野をわくる　岩ねまくら
ひなれ長路　ゆくてなる　ゆきわかれやむ　舟人のゆふく

木陰に休らふ　旅ね　一夜の宿　やどかん　とけてねぬ
それいひ　かりゆく　いく山　わたる川越へ
旅ゆく旅　嘆くみさき　浦づたひ　うらづたひ　なれつきぬ
吹きおくれ　枕のあたし　別ぬにつけ　からねの宿
都のゆきん　草のやどり　里とひかぬ　やどにやどる
かへるおもし　手向の神　ぬさたむくる　ゆづりあふ
つかれたる　あゆひはつ　国　ふるさと
隔てられ　まだきさく　まちまち　かへるさ
夏ふく風　旅つかれ

万二　家にあれば笥にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる　有間皇子
゛一　うちきらし山風さむし旅にして衣かへきゆ妹はあつれくる　長奥麿
゛三　旅にしてもの恋しきに山下の赤のそほ舟沖へこぐみゆ　黒人
゛　まつち山夕越ゆきていほさきの角太川原にひとりかもねん　弁基
゛五　天ざかるひなにいつとせすまひつつ都のてぶりわすらえにけり　憶良
古　あふ坂の嵐の風はさむけれどゆくへしらねばわびつつぞぬる　読人
後　草枕ひとまれなる山のへにゐてなくぬれや旅寝　いせ
拾　旅ゆくも袖こそぬるれかかる山の雫に嵐はおわせけむ　読人家
六　いつとても都にこひしきを旅ねにまされ衣手をふかくかたしき　゛

○旅泊

海旅のとまりとまり
とまり舟　かぢ枕　浦枕　うきねの床
浦ね　浦ねの床　舟とめて　みなと
まちぬる　よるべ　あさなぎ
波風のよる　一夜ばかりの舟　浦さき　波の底　枕の下に引汐

たちもとまり　波のうへ　志らぬ舟とまり　こちやいつて
これられり　浦よりくる　行かふ波　波のうへより
都の方　八重の汐路

名所　武庫ノ浦 摂津　三津ノ浦　鳴尾ノ浦　明石ノ浦 播ノ　室ノ浦
南平ノ浦 筑前　古屋ノ浦 紀伊　寺ノ浦 越後　琢ノ浦 越前

万一　にきた津よ船のりせんと月まてハ志ほもかなひぬ今ハこきてな　額田王
ゝ　あしへ行鴨のはかひよ霜ふりて寒き夕へハやまとしおもほゆ　志貴皇子
ゞ　大伴の三津の浜の松をもまきてめる我ハ國しのふらむ　置始東人
ゞ三　あハちのゝしまの崎の浜風よいもかむすひしひもふきかへす　人麿
ゞ　あらたへの藤江の浦よすゝき釣海人とかみらむ旅行あを　ゞ
ゞ　名くハしきいなみの海の沖つ浪ちへよかくれぬ大和しま根を　ゞ
十五　海はらよ(う)きねせん夜ハ沖つ風いたくなふきそいもゝあらなくに　よミ人

ゞ　大君のみことかしこみ大舟のゆきのまにまにやとりするかも　壹岐宅ノ呂

○餞別　○送別

わかれゆき　そてかくる　はなさかり　いつまてと
ゆくをしき　立別れぬ　きみかゆく
かへりくるまてとしへてもあるへし

万九　後ゝよハ我ハこひさん君入山よ宿をかしえこるえいれハ　よミ人
ゞ六　ますらをの行といふ道ぞおほろかに思ひて行な丈夫のとも　聖武帝
ゞ三　梓弓引豊国のかゝみ山見すひさならハ恋しけんかも　按作益人
古　雲井にもかよふ心のおくれねハわかると人にみゆはかりなり　深養父
ゞ　思へとも身をしわけねハめに見えぬ心を君にたくへてそやる　淳行
後　きみしらすわかれてのちハ恋しくもむかしをハ語せつらん　よミ人しらす
拾　たちかへる旅むすふ人のかへるまて向の森そまつへかりける　ーの子

六 母おもふ心に風はなれてもしなるわれをちかの手本 よしのぶ

○留別

万十二 よそにのみ見をおもひゆきてみよ白の山をにほひて我らん 読人不知

〃四 むかしみて見しもはやぬまき子にたちかへれらん 大伴

〃十 さゝらゝの母をわれて津なる旅のはゝかやれくねんか 之中

古 人やかはる我ちかくに大なるはいきうしとはひてはさるへてとん 此る

〃 あはでおもき袖のしらむは見るかるみてみてゆく 経

拾 われゆくを人はまもしひぬを坂はかへるてらんの名まてそまれ 西行

○形見

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かたみのみ

万九 [illegible] 水のもとに 妹か形見 [illegible]

〃二 [illegible] 友則

古 [illegible]

後 [illegible] 忠岑

拾 [illegible] 元輔

○幽思

古 [illegible] 読人不知

後 [illegible]

拾 [illegible] 伊勢

六 [illegible]

○感思

感思ハこゝろに物をおもふまでもなくあはれと感ずる歌

後　あはれてふことにしるしハなけれどもいはでハえこそあらぬ物なれ　よみ人しらず

拾　春秋におもひみだれてわきかねつ時につけつゝうつるこゝろハ

ゞ　大かたの秋よりほかにかなしきハみる時ハいつもかなし　ゞ

六　なれきつる年の暮にもおどろかれ[illegible]めにはみえける　素性

○述懐

おもひきやうきふしのみ[illegible]かくれハなきかな

これによりかれに[illegible]おもひをのべて[illegible]

すぎこしのおもひ　世のなかに　をのれうき

身のほど　あれば世中　まよふころ　[illegible]

世をすてゝ　ねこゝろ　[illegible]

わすられ　かくてもおもひをさへせぬ　身しけき世

引人もなく　あはれ[illegible]くらし　すひきれて

世をいとふ　あやの風　なきハ[illegible]

ながき秋よ　ますらを　なほハまちなん　いのちもこそ

五　なのにやすむとき[illegible]かたりつくき万代にかけて　たか

ゞ　世の中をうしともいはむかたなしと思へばなほぞつらくもあるかな

ゞ　なげきつゝひとりぬるよのあくるまハいかにひさしき物とかハしる

古　わが身からうき世中となげきつゝ人のためさへかなしかるらん　読人しらず

ゞ　みてもまた逢ふよまれなる夢のうちにやがてまぎるゝわが身ともがな　文

ゞ　世のなかハうきものなれや人ごとのとにもかくにもきこえくるしき　業平

ゞ　よの中にたえてさくらのなかりせば春のこゝろハのどけからまし　よみ人しらず

ゞ　ほどもなくなきてもおなじ世中をうたがはしくもおもひけるかな　読人しらず

〃 むかし見しをもねざめにいくつまで数ふる身は八十くれのあかつき　頼政

猿 いくつまで見ぬ人ぞ知る大和なるきの杜の下紅葉ちりけむ　ことも

〃 信ぞと身はつれなしと思へどもなほいとひてぞ鳴きける　兼昌

〃 都にしは住みなれしこの国の住みかはりなく里まで私ゆけ　忠見

六 ほりしてはなほ心をとどめられてもなほ菖蒲ひきつつ身は　基俊

〃 紀の国の浜の浦の浪もなみを志つくとあらはれにけりくらん

〃

○懐旧 ○往事

こひしのぶるを思ひやれ世のことむかし人の世のむかし

まことぬ世のむかしの事をききあり　西行法師

ふるさとは　ふるむかし　身のむかし　しのぶむかし

きききむかし　いまし　うかある

むかしかたり　世のむかし　世の面影　ふる身は

ふる浅ぢ　こし世をききてやくの世　忍ふる

色て見ぬ月は　月やむかしの人　みなひとる　後よ詠む月影

頼もし　あきの月　むかしを思ふと　なりし人

五一 いにしへの人も我あれや浅茅の露しげき数ふれは恋しき　正人

〃三 とにかくも忘れぬ今もはかなきをなき人を思ひかけける　明恵

〃 あはれその浜夕暮なる形見は見し志のよはいにしへおもかげ　人丸

〃二 思ひ代の世をすてて結ひ松行くみえし実にもかけ　意法上人

〃三 うつりなき人は身も心とどめて見ればいかに　赤人

古 かくも来しむかしの浅よ見しも植ゑし人の身をしのびき　西行

〃 あはれてふことの葉はふるく言葉も思ふる後こそ　よみ人しらず

艮 ふるふことも明日は苦し昔のむかしはかなき思ひ出でとく　大輔

〃 植ゑし二葉の松は今年も見えわかず木の子の木の末を思ひつき　つらゆき

拾ハ嬉の山ちかし 精精ハあちこちを 一人ハなくていく世そ　之楠

六 大工ハ山のかうこ 香あめこし 竹ゆるにし独ハぬれならう　まさ人

〇夢　ゆゑ

ゆめなれとも　夢路　夢のうつゝ　さても一の夢

みじかき夢　ゆめてふもの　夢の通ひ路　一夜ねゆゑ

見ハてぬ夢　夢の浮橋　まどろむ夢　むすぶ夢

夢のうち　手枕の夢　ひるねの夢　夢のうきハし

思ひ寝の夢　うき世の夢　夢みところ　夢ともいハれし

ゆめうつゝ　長き夜の夢　春の夜の夢　しかきれり

夢の世　光のおそう　夜を待れ　ぬるの中

ころ　さむる　打しろく　子の口

とうみよ　かへ夢之

古 [illegible]夢のうちハたのまれん　としゆき

〃 ぬるがうちに見るをのみやハ夢といハんはかなき世をもうつゝとハ見ず　深養父

〃 命にもまさりておしくあるものハ見はてぬ夢のさむるなりけり　忠岑

〃 うたゝねに恋しき人を見てしより夢てふものハたのみそめてき　小町

〃 思ひやる越の白山しらねども一夜も夢にこえぬ夜ぞなき　つらゆき

后 君をのみおもひねにねし夢なれバわが心から見つるなりけり　躬恒

重 [illegible]夢のうちにも[illegible]　友則

〃 ねぬる夜の夢[illegible]かとおもへバ[illegible]　読人しらず

〇無常

定めなき世　定めなき世　夢の世　長きよの夢

あだし野　露の身　ゆめぬるのあと　いしの火

指南　かりそめ　さだめなき世　おもれさくら

人の世は舟　何されはなき　さらぬおもれ　古き枕
古きに住ま　いつれまて　粉れぬ世　泣ちる涙
うきその世　目の前まる　浮ひの手すか　うきそは世
見る影きの世　何う見え影　露う身の[illegible]　関徹
行水の[illegible]らぬ

万五　世の中八むれき枕と声はしはてくすぬかわかは　大炊
〃三　うき餘の世は見え影とる我を枕風きみ声めひたるかな　家持
〃　既のよのみ舟の[illegible]ろ雪の声よ行んと我身は行く　弓削皇子
〃　世中をはてしと人我ひろまつきいは舟の行れきなりて　沙弥満誓
古　よの中は何か常なるあすか川きのふの淵そけふは瀬になる　よみ人しらず
後　はかなくて[illegible]しとおもひしかと[illegible]きとそ[illegible]ぬ[illegible]たれハ　〃
拾　[illegible]き身をはなれし[illegible]と人[illegible]も花は[illegible]て[illegible]る[illegible]　公任

○哀傷

ゆふへの空の　よその[illegible]の　[illegible]ぬみ[illegible]細き　あくしのゝ雲
消る白雲　[illegible]れはてそら　玉ゆらの露　むすひきし玉
[illegible]きを[illegible]きゆく　昔のしき　[illegible]の[illegible]　さらぬわかれ
つひにゆく　これや夢　雲かくれ　見えなくなる[illegible]
消えてる　[illegible]山の夕まくれ　行よの[illegible]
山の露　ゆくへのかなた　かきりのみち　[illegible]川
しての山　[illegible]へよおもふ　[illegible]の[illegible]　まつ[illegible]
ちはるみて

万二　[illegible]をうつせはみよ[illegible]て山[illegible]をゆふ[illegible]は[illegible]て　人麿
〃　[illegible]きてわかやましろ八玉[illegible]のわれむきけて[illegible]の本[illegible]　〃
〃九　[illegible]の[illegible]山舟はおくれて[illegible]　よみ人しらず

〃二 法の師の[illegible]の[illegible] 人丸

古 [illegible] 登蓮

〃 [illegible] 光之

后 [illegible] 伊勢

拾 諸人の[illegible] すけきよ

○墓 おきつき

万三 [illegible] 赤人

〃九 [illegible]

〃三 [illegible]

○葬 そうそう

古 [illegible] 勝延

拾 [illegible] 元輔

○釋教 ほとけのをしへ

釋迦ハ法華経浄土の三部経ちとしるかの要文のこゝろを
とりてよめる[illegible]あれと[illegible]経説の[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]に[illegible]

鷲の山 [illegible] 鹿の苑生 鶴の林 霊の山人

月のよる 法のさき 法の舟 法の師

法の水 法の花 法の深木 [illegible] 蓮の葉

彼岸 [illegible]の海 浮世をはなるる [illegible]

葉つき水くき [illegible] [illegible]

うき木 [illegible]の法 [illegible] 宝の池

薪つき [illegible] 夜の[illegible] 三の車

[illegible]のみ [illegible] [illegible] 法の門

西のそら　浄土のきし　にごりなき水 蓮華　法のはな

墨染の袖 すゞしの衣　法の坊　法の道芝　ともしひ之

二の海 生死　法のまことしめさる法　みなあつまるむつく　十の法のみち 十界之

五のさはり 廿五障之　よろづの事ちかまへて 六道四生之　その時代 釈尊の出世 之法の説たまふ

三のみち えんまの庁之　すくひの法名　法のちから　法の舟人

なかひの光　人の身 宝の山 持の月　寺　かね

五十六億の七つの海をたとへし志ゆひの光を志めしつるかな　上人 定家

〃　世の人のまよひをかゝけばすゝしくて法の國の法するゆゑ　〃

〃五　常住をすてゝ我ひのひかりをむかへていれて天路うしめ　〃

玄字 〃　氣をとれ法の道に入る書八ぶる事の光るかとみる　清正

読古 〃　ワいわ山むらむ法の人をひとみつめ八ぢの衣八ぢにあひけり　時房

〃　淨土のやのむかへ　く來たり八ぢこえて　人のきけぬちかひけり　教海

〃　むかしけさ法のとかしむ大きつかせ八ころ佛やゆの法てそれは　公雄

〃　志りしみ人のこゝろにまとひてもつべきのちかひかな　内大臣

読 於　法の花びらむひ合にちかひを行ひて八十の聲よに法めぐる　良俊

新古　人の手こころを手にとつて法わるこの世の佛のみちをしるそや　家良

〃　尺迦の孫の法のおとなへのひかりを今よくもちひとつ　行実

○社　。社頭　やしろ

よもの社　國つ社 天つ神社　神のきむろ 神戸之　志めゆふちなわ

みむろの縁　まくみのくさ　清戸　くものやしろ

神のかきやくさ　とつ垣 玉垣　大前 宿前　宮ばしら

ちぎ　かつを　とぶ火　ゆふしで

神やしろ　御幣 さかきの葉　やをとめ　神のきね

うみの宮　ひかる木　八ひろの　神のまへ

きぬくみ　とやすゑまつる　とよくら　きみくら
神の宮人　神垣の松　杉　神やつこ　をとめ子
いろくづ　めぐみ宮　はやしろ　神ごゑ

伊勢　神風の伊勢　内外の宮　いすゞの宮　神路山　みもすそ川　いその宮
天照神　むかしの世　山田の原

後拾　杉あらば又こまつすげちらみよをてよいつゝもかしこきへんらん神　輔親
拾古　宮けらもつゝ岩ねにまきてくもかもねのみかけれ　和泉

齋宮　内　いつきの宮　竹の都　いつきのみや人
新　くれ竹のよ世をもかんにはちと世のこうひかくし　道輔

岩清水　八幡　八幡山　さかめ行れ　をとこ山
続　をとこ山鳩のみねのさくらそ清き人の行みのこゝをてくへく拝み宮　道信
後拾　おく山にきて出る岩清水神のこゝろをくみもしらんや　増基

賀茂　日　下鴨　御祖皇大神　玉依姫をまつる　同会ていすゞ清神之
上賀茂　別雷皇大神の清社之
これ紀の清社なり
御手洗川　かた岡　みたらし　ならの小川　神のみつれ
かみ山　こうしの森
新続　めぐりくる車よいさひあふひをや神もうけるとみそれてらん　能仲
新　いかれるをハくれしのふハ葵はなさをみ衣よしとおもへくらん　はなまる　皇后宮

松尾　日　神垣の松の尾山　松の尾のまつ人なきをまつらむ　大井川
後拾　くみ見る波松の尾山のかみまちハうたかたもちよの千とめみかる　兼澄

平野　日　やつれ氏神　平のゝ原の行や杉　平のゝ宮　河杉のならき
拾　ちはやふる平のゝ松の枝しけくおほくも世をもいのらんかし　よしたゞ

稲荷　日　三の玉垣　三の社　三の峰　杉の屋　瓢の水
後拾　稲荷山みつの玉垣うちたゝきわかねきことを神もうけくる　恵慶

千 いかな山志るしの杉のまかりてみ代のかみしろかくたのみけり　定家

春日

日 春社　春日山　松さく森　山ハ三笠の神　春日神　ときみゆきの杉

さしてゆくかたはさほの川風　三笠山　なら坂

後拾 けふまつる三笠の山の神ませハ雨の下にハ君そさかえん　能宣

金 三笠山神のしるしのいちしるくしかありけりとしらせつるかな　家忠

大原野

山城　大原やをしほの山　小松原　姫小松　大原の神

古 大原やをしほの山もけふこそハ神代のことも思ひいつらめ　業平

新古 をしほ山神のしるしを松の葉にちきりし色ハかへるものかハ　慈円

布留

大和　石上　ふるの社　ふるの神垣　しめゆひし　ふるの神杉

万代 文よせし昔のちきりめくりこそふるの神杉人やしりけむ　経家

〃 石上ふるの社の神のかみさひてものいはぬをもみるかあはれ　兼直

住吉

摂津　世をすみのえの神　天くたる現人神　橋の小門の波せまみあられ

日の本しるし　ちきのかた合　きしの姫松　このねの松　松こそ神のこゝろ末

拾 天くたる現人神のあひおひを思へハ久しすみよしの松　安法法師

千 神代よりはかりの浦に宮居してへぬらん年のかきりしらすも　俊季

日吉

近江　七の神垣　ちかひの神　七の社　日吉の影　しかの神垣

拾 ねきかくるひえの社のゆふたすきくさのかき葉もことやめてきけ　実国

新 志らなみのよるのしるへとてらすなりうき人のためのひかり　慈円

梅宮

山城　並木の梅　なにしおふ梅のみやしろ咲やこのふしもなき　梅津

うめはの川

吉田

日 かすか原　さえめか田　九重　いまきよし田　松風の声

祇園

日 白川の神のこゝろ　神のますかけ　八重のしめ　かつら　小車川

ふかしのさくら

後拾 ちはやふる神のそのなる姫小松よろつ代ふへきはしめなりけり　経衡

貴布祢 日 きふね川 波のしらゆふ 河上の神 くらま

新古 大田の宮ちはやふる神せきかへし みなかみ 杉も世川上の神 李子

北野 日 九重の北野 あら人神 ゆふけし 一夜の松 小のくみしき

三輪 新和 杉たてる神のまちしら しめ引てこの杉村 三輪川の清きなかれ

神よ我ゆくくさし柳 杉原 あら場の宮 うま場の宮

夫木 やそぬはにたる三輪のすきふりても世くへん我世の人めるいたる杉むら 業平

出雲 新古 出雲八重垣 いつもの宮 杵築(キツキ)の大社 簸(ヒ)の川上

玉出島 紀伊 玉つしま 玉出しま わかの浦

六 柳はらけなきさるかたに ゆくへめくみさかなよ玉出しま 京極入道

熊野 日 三つ山 ちかひある熊野の 浜ゆふ 岩田河 たちの神つき 三の院

玉 天降る神や影をうつしとめのみなれよちよ紀伊本宮さそき 能宣

○祈雨

玉 天の川苗代水にせきくたせ天くたります神ならは神 能因

○祈晴

新勅 天津風あなたの八重雲を吹はらへ 神かけきりをはらひけん 慈圓

○注連

志めくめ縄 しめ縄 うちしめ 引しめ さし しめをへて

やへのしめ縄 かくる 志めゆふ むすふ へのしめ

新古 神風や山田の原の榊葉に心のしめをかけぬ日そなき 慈圓

○木綿 ゆふ ゆふしで

ゆふかけて 庭のゆふかけて やへのゆふかけて 神のゆふかけて

宿の ゆふかけて まさてゆふ 白ゆふきて ゆふかけて

みしかゆふ ゆふかつら ゆふしきて

かくる そそく 神楽にかくる ゆふひく

○祓麻　ぬさ

大ぬさ 引手あまた　麻ぬさ　埴ぬさ　切ぬさ　ちらん　ぬさ奉る　手向

後 かみがきにぬさとりぬさとり手向ちらしつ秋もくもにやけんかな　大輔

六 わたつみは秋くもひろげ神よせ向けるぬさの追風ま吹れ人　よみ人しらず

〃 住よしていの神ぬさのおひまはるの世の神やしろらむ　貫之

○神祇

天つ神　国つ神 二神　ちはやぶる神　八百万神

すべらの神 すへ神　皇神　八百万神　千よろづ神

祝子の神　ちはやぶるの神 柏木　神のいがき　神のをしへ 神の心

法八千ちん神 邪神 悪魂ちはやぶる神　ちはやぶる神　神風

神さび　神まつ　神あそび　現人神

新三 大伴の弟彦の守けん志つ見ハちやハいく代なるあら森　生玉 村主

古 かくておもひおきてかはらぬ万代ハ神そしるらんつもりのめかあ　素性

新古 神風や玉くしの葉をとりかざし内外の宮に君をこそ祈れ　俊恵

後拾 榊葉にふる白雪は消ぬめり神の心もいまやとくらん　伊勢

千 月よみの神し照らさハ天雲のかくるゝ世にもあれさらめやハ　為之

金 三つ瀬の又しる人は天の戸をあけ神やそこにしづむらん　為忠

玉葉 千早ぶる神のしむらん万代にとほくいく神掛　かく氏

〃 榊葉のかはらぬ色に年ふりて神代ひさしき天のかぐ山　為家

新拾 みたらしの又しきかは清くの神さびまさる新やそふらん　秀氏

○祝　○慶賀　いはひ　よろこび

千代　万代　八千代　八千とせ　いく千世 いく世 いくよ

よろづ世　いくちとせ　ちるき世　ときはに

かぎられは　うごきせじ　はてもせん　とことは ときハ かきハ

すまふるひ　さかゆるきつえ　千世のためし　よゝの秋　千世の春

浜の真砂て　尽ある限代　久しからぬ　されば

松竹　友鶴すむてる　すむ亀あるふ　千歳枝

八千代の枝　まきうしも　松の常磐十かへり　うら安のくに

うごきなき　正木のかつら長く　ゆたかなる　ゆたかなる

波風きこえぬ　世のあり数　よろこび久しき　をさまれる世

宮柱の下にし　民やすく　きさらぎの数　国ゆたかなる

かぎりも時すぐえぬ　風をさまれる　清代のしるし

天のめぐみ　限りなき世　月日もよろづ代をまもれき

万六　清く民やすらにまつりごとをしめす　あり天地のほかのまつりのおこなひもつかへなる　国宮

〃八　はるかすぎきを花咲くふさ年ふる木まてつくりなる万代まてえぶし　えぶ重

〃十九　天より神も五百代の代治まる代の国のしるしを見る百つる年足

〃　まつねの松のつえよろづ代かつらくいはふことしも年はくとふ　家持

〃　千鶴をまたうれしき月日のかずかぎりなくある人来るのまゆの良はん　慶帝

〃　ゆきかへり付のみ万歳大君の国さかえんと月をてらし　まさ人

古　けふよりの庭のまさごをかぞへつゝ君がよはひのうらおもきん　〃

〃　泉のそこの山の岩ひきとあそぶ松つる院のしらむ千世の数にも　友則

〃　うれしさを何につゝまん唐衣たもとゆたかにたてといはましを　読人しらず

拾　みな人のきつゝむ衣をかさねてもかぞへられぬ万代やへむ　よしのぶ

後　君がためあふ日てらる万世も子の世もこもれる心地こそすれ　清正

六　おほのの松とむすびてちるもの数ふのみの親子久しきをあらはしけり　兼之

○産屋　うぶや

拾　松の枝のかずにうつ枝をとりそへてすへてらるためしあまき鶴の齢を　元輔

〃　万世をかぞへんものは紀の国の千尋の浜の真砂なりけり　〃

〃 松の若葉の年をかさねてむかへ来れ鶴のよはひ子の千とせもみちて 〃 影房

後拾 これもまた千代のはしめの生そふ松の二葉なりけり 久米

○七夜

拾 きのふ祝ひの松の葉ぬる朱にまつ祝ひの月をと思ひ社出れ 能宣

〃 天文八年萬代をかそへてみれハかゆしけれと七日あるなりけり 能宣

○裳着 もき

拾 もし萬まてもせの年ハおもわれとけふの天[illegible] 好古

後拾 行末の[illegible]のむすひも祝ひあへて千歳の[illegible]のかさをそへてよ [illegible]

○元服

拾 結ひ初る元結の[illegible]こそ千歳よう[illegible]れそ子 能宣

〃 去むかし[illegible]位の山のふみをそへてん 元輔

○年賀

天のよはひ 鶴のよはひ きる杖 鶴の杖

竹の杖 千世萬代 ワかよはひ 家をつむ

天々八千世

万年 まけ枝ためてはく杖る[illegible]八十世母刀自 松久[illegible] 坂田ア[illegible]

〃 ワか世て[illegible]天地の神をこひのみ[illegible]思ふ 清右

古 [illegible]天に八千世よ[illegible]おもひ出せよ [illegible]

〃 万代をまかせ川まて天をいひつる千年の[illegible]と思へるを 素性

〃 桜花ちりのひる[illegible]のこんといふ[illegible]かりし 業平

〃 鶴のあもすとものはハ[illegible]せけそん 後左

〃 この九しはとふもかに[illegible]へて天の八千世よの[illegible]れ 仁和 日記

〃 老めてなしみ[illegible]せめきさん[illegible]ありて[illegible] とし行

自 百年と[illegible]八十[illegible]ありけれ 読人不知

今やりし婆子の跡まれ花こ
持のかりし秋く孔を色ふくを
たゞ此月に備さく古て聚め跡
林ありまた行く露 吉子の子かり者
候まし菊みのくてるしらひ字
くしまちく やまねく此ま流まつ
少年や凍るふ気き文つく直跡かと
とみうしと老くを作まし跡を筆

巻之四終

天下めでたき世の枝され八事を尽せぬよしさこの作者 すゞの子
万代を止けやうそと世く加そ女主八秘かなるけさこ見え古代られ 黒染き

桜のあるじはやくえとめくか
くちをしき事なれバいとおしく
あはれしかしてことそなるゝい
侍る花き笑ひ世にむつく
ありてかくもむかしハ都
のゝ路中ふしおもひのおもろ
にみしらぬ人に行きあいしを
かゝるれへにつきていかにみえし

されはのこゝろはしハこそ結ひつるも
世の中の山のきむたえきまた
たちかれ花となくなみ川へ
ひとめてるゝ行るゝ小山の里ひ
あさ保のかれとくつハこゝろつけ
記まてやうく四まての佳ゆうし
とハたまはる侍り　蜩屋主人

發行書房

江戸日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛
同 二丁目 山城屋佐兵衛
同 芝神明前 岡田屋嘉七
京御幸町御池南 菱屋孫兵衛
大阪心斎橋南一丁目 敦賀屋九兵衛
同 北久宝寺町 敦賀屋彦七
同 堺筋金田町 象牙屋治郎兵衛